

南砺市立井波歴史民俗資料館 118回 企画展 平成18年4月14日～6月25日  
見学会・シンポジウム(平成18年6月3・4日)資料集  
増補改訂普及版

2008

富山県南砺市教育委員会

# 南砺の城と人

—戦国の寺・城・いくさ—

## 増補改訂にあたって

平成18年に開催しました「戦国の寺・城・いくさ」—南砺の城と人—の見学会・シンポジウム資料集が、好評により終了後に残部が無くなりました。まだ欲しい方もあり、増刷することとなりましたが、その後の調査から新たな発見もあり、増補改訂して発行する運びとなりました。最新の五箇山の中世史研究の成果に、次々と見つかる城郭遺構の発見が加わり、山間を結ぶ道と要衝の中継地が見えてきました。

絹・紙・漆・材木・塩硝など商品の原料となる宝の山に住み着いた人たちの作業拠点は、やがて山麓に集結したす井波・城端の職人街となります。蓮如の影響が色濃い瑞泉寺(井波城)と寺内町の成立は、南砺山間山麓の豊かな経済に支えられていました。そこには蓮如へ深く帰依した妙好人赤尾道宗とその背景となる中世社会の姿が浮かんできます。本書が真宗王国の成立と南砺人の気質の源を探る一助となれば幸いです。

# 南砺の城と人 —戦国の寺・城・いくさ—

開催期間 平成18年4月14日(金)～6月25日(日)

会 場 井波歴史民俗資料館(富山県南砺市高瀬736)

主 催 高瀬遺跡保存協会・南砺市教育委員会

## 期間中のイベント 井波歴史民俗資料館を拠点に展開

6月3日(土) AM9:00～ 現地見学会

井波歴史民俗資料館～(市バス)～八乙女山砦周辺「道宗道(どうしゅうみち)」を散策～(市バス)～井波城跡(旧瑞泉寺)～(市バス)～資料館展示見学

6月4日(日) AM9:30～ 研究発表(シンポジウム) あずまだち高瀬(資料館横)

仁木 宏(大阪市立大学助教授)

久保尚文(永見市史編さん室員)

高岡 徹(富山県埋蔵文化財センター副主幹)

金子良成(井波自然観察友の会長)

共催:南砺市

後援:富山県教育委員会・北日本新聞社・富山新聞社

NHK富山放送局・北日本放送・富山テレビ放送・チューリップテレビ

富山エフエム放送・エフエムとなみ・となみ衛星通信テレビ

## 展観の趣旨

砺波地方には一向一揆の拠点となった旧瑞泉寺跡(井波城)をはじめ、城端善徳寺、末友安養寺(勝興寺跡)などの城郭寺院跡がのこる。これらは、城郭寺院や寺内町のあり方が、越前吉崎御坊や京都の山科本願寺から、加賀塔尾超勝寺・山田光教寺などを経由し、越中へ波及したことを跡づけるものである。また五箇山の赤尾には蓮如に深く帰依した道宗(弥七)を中心に浄土真宗の篤い信仰が形成された。近年、高清水山地の山中に中世の山城とみられる遺構が次々と確認された。これらは戦国期に五箇山を防衛するため峠や尾根道の交通路の要衝に築かれた城砦群とみられる。さらに五箇山や南砺の寺院には、当時の様相を窺い知る希少な記録が伝えられている。これらの貴重な資料を一同に展示することにより、一向一揆に見る南砺の先人の壮大なエネルギーを学び、地域の歴史を再認識することで明日の街づくりに活かしたい。

# 目 次

## 図 版 (展示)

越前国吉崎浦近辺絵図(松平文庫)【福井県立図書館蔵】	1
山科本願寺旧跡絵図 「山科泉水山絵図」(栗津家記録)【大谷大学蔵】	2
塔尾超勝寺・山田光教寺 「江沼郡古城跡図」より [加賀市 久保幸彦氏蔵]	3
古国府勝興寺古城跡見取絵図(安養寺古図) 明治14年(1881)【高岡市伏木図書館蔵】	4
城端絵図 享保11年(1726) 市指定「南砺市蔵」	
井波町絵図 宝永7年(1710)【南砺市井波図書館蔵】	5
杉谷山瑞泉寺御坊舗地絵図 安永4年(1775)【瑞泉寺蔵】	6
井波城縄張図「第九師管古戦史」より	7
井波古城由来書上「井波古案記」より宝曆5年(1755)【南砺市井波図書館蔵】	
顯如御影・教如御影【善徳寺蔵】	8
善徳寺宛 上杉景勝書状 天正10年4月(1582)【善徳寺蔵】	9
五箇山惣中宛 上杉景勝書状 天正9年10月(1581)【南砺市山崎甚三郎氏蔵】	
赤尾宛 佐々成政制札【南砺市真田治悦氏蔵】・伝 空勝(善徳寺6世) 使用の軍配【善徳寺蔵】	10
瑞泉寺から赤尾へ 道宗道(推定ルート)【立体地図】	11
高清水山地の城砦群と交通路(道宗道は推定ルート) 高岡微氏「越中五箇山をめぐる城砦群と戦国史の様相」「中世の風景を読む 第4巻」より	
八乙女山砦跡周辺図・高清水山地 八乙女山～大寺山 井口城跡(中央の墓地)付近から	12
南砺の城砦群縄張図 小屋場平城・新山砦・田中平城・鉢伏山砦	13
井波城跡の発掘調査/レーダー探査箇所・井波城跡(航空写真)	14
赤尾道宗覚書(道宗心得21ヶ条)2編【行徳寺蔵】・【道善寺蔵】	15
五箇山十日講衆申定【南砺市生田長範氏蔵】	
割り木の上の道宗像【行徳寺蔵】・棟方志功版画	17
天十物語(冊子)【道善寺蔵】・五箇山の念佛道場(県指定)【南砺市上中田】	18
闘諍記(冊子)【照円寺蔵】	19
文明13年(1481)砺波郡一揆関係図(『富山県史』通史編Ⅱ中世より)	20
五箇山合掌集落(相倉・音羽)	21

## 展示目録と解説

### 古文書読み下し文

善徳寺宛 上杉景勝書状・五箇山惣中宛 上杉景勝書状・赤尾宛 佐々成政制札	26
赤尾道宗覚書(道宗心得21ヶ条)	28
五箇山十日講衆申定	30
天十物語(冊子)	32

### シンポジウム発表要旨

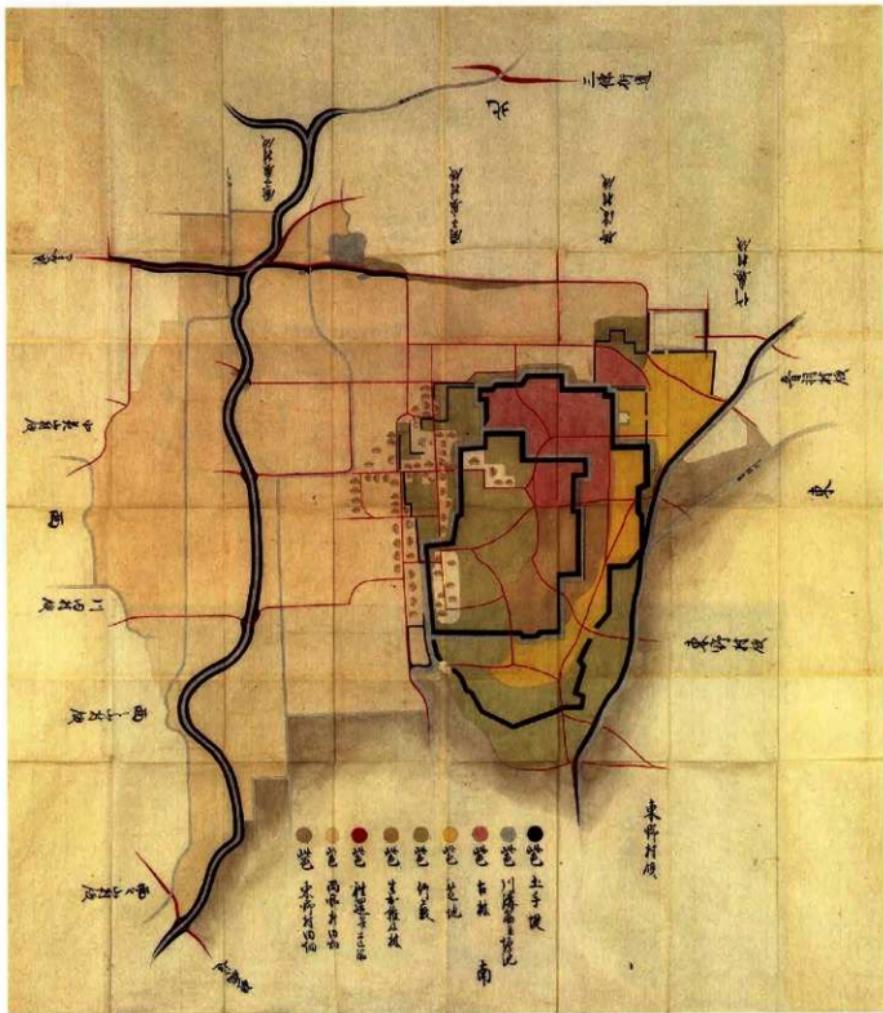
真宗の没後 - 瑞泉寺と五箇山 - 久保尚文(氷見市史編さん室員)	38
戦国末の五箇山と織田・佐々氏 高岡 徹(富山県埋蔵文化財センター副主幹)	49
戦国のまちづくり - 寺内町がむすぶ近畿と北陸 - 仁木 宏(大阪市立大学助教授)	53

### 増補

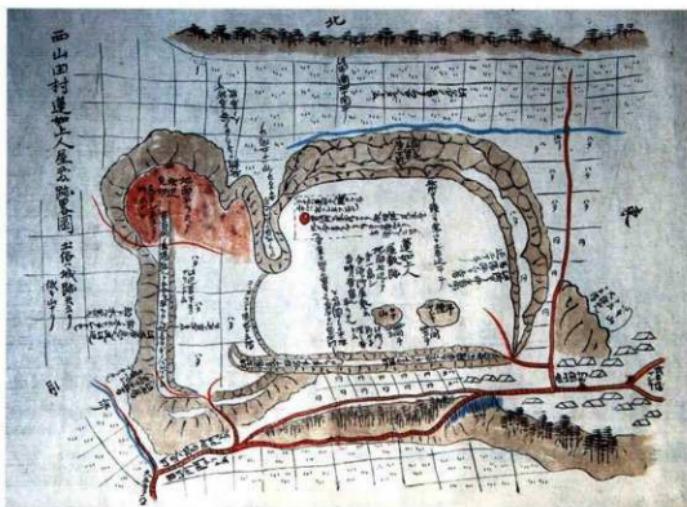
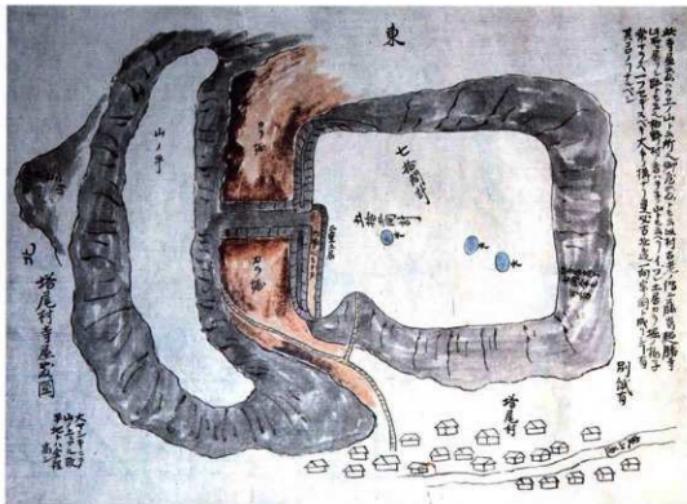
杉山砦の発見をめぐって 一県内最高所の城郭遺跡が語るもの - 高岡 徹	65
高清水山地縦走調査報告 一稜線の山岳古道に城郭遺構を求めて - 高岡 徹	71



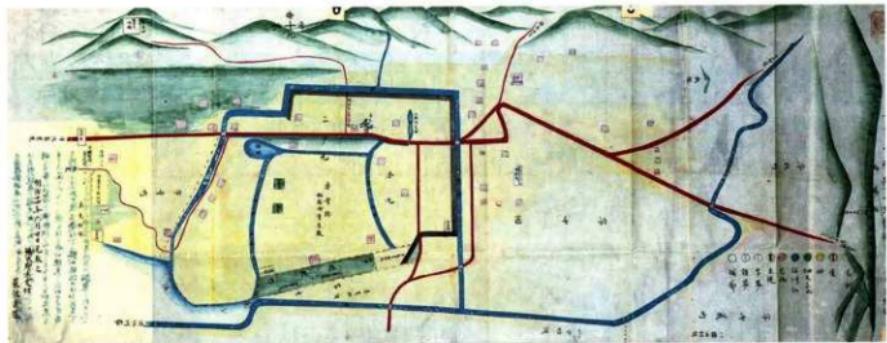
越前国吉崎浦近辺絵図（松平文庫）【福井県立図書館蔵】／116×160cm



山科本願寺旧迹繪図 「山科泉水山繪図」(栗津家記録) [大谷大学蔵／95×83.5cm]

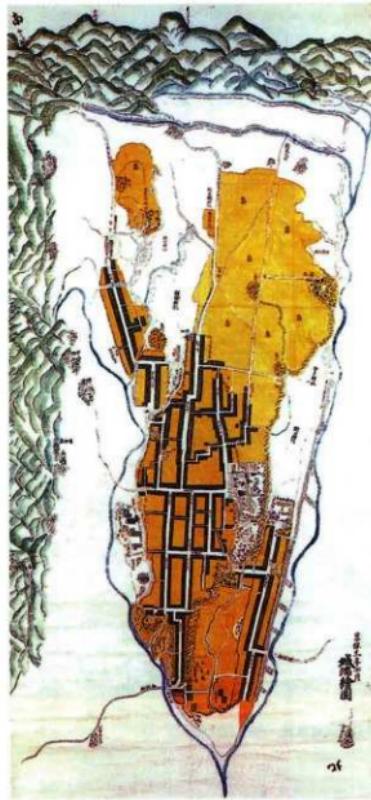


塔尾超勝寺(上)・山田光教寺(下)「江沼郡古城跡図」より [加賀市 久保幸彦氏蔵／27×1822.5cm]



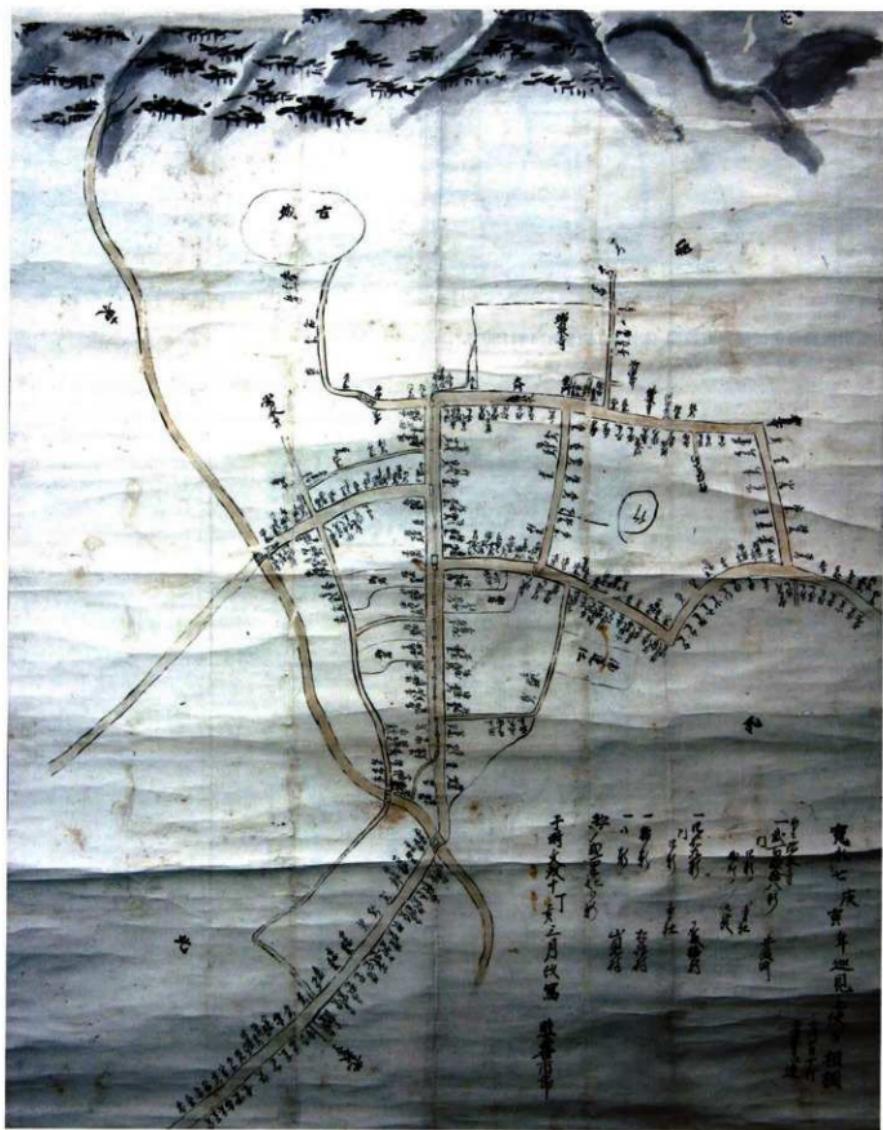
古国府勝興寺古城跡見取絵図（安養寺古図）明治14年(1881)

[高岡市伏木図書館蔵／40×109cm]



城塙絵図 享保11年(1726)

市指定  
[南砺市蔵／256×121.7cm]



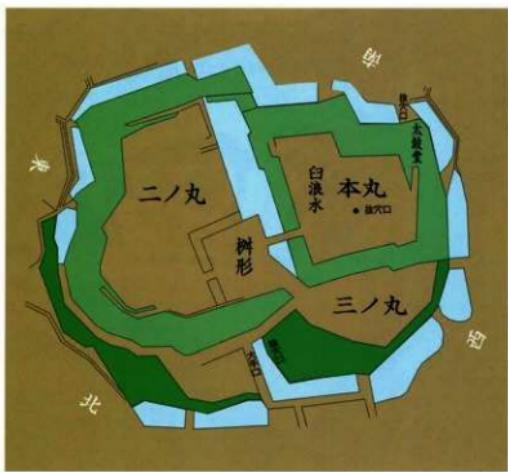
井波町絵図 宝永7年(1710) [南砺市井波図書館蔵／89×69cm]



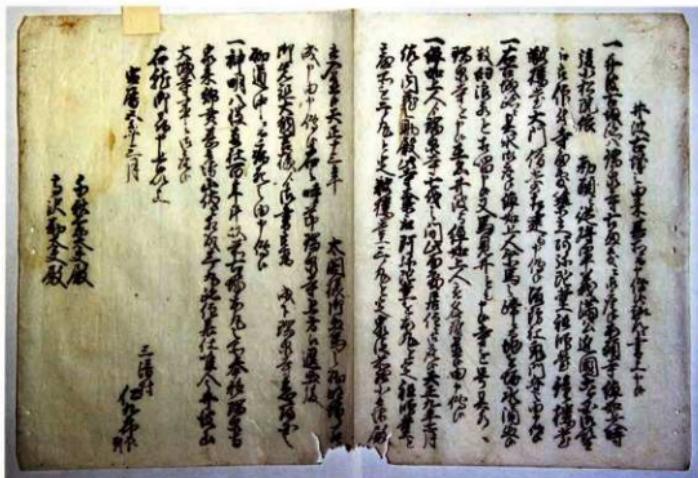
杉谷山瑞泉寺御坊鋪地絵図 安永4年(1775) [瑞泉寺藏／169×237cm]



同上 部分拡大



井波城縄張図〔第九師管古戰史〕より



井波古城由来書上〔井波古案記〕より 宝曆5年(1755) [南砺市井波図書館蔵／23.5×18cm]



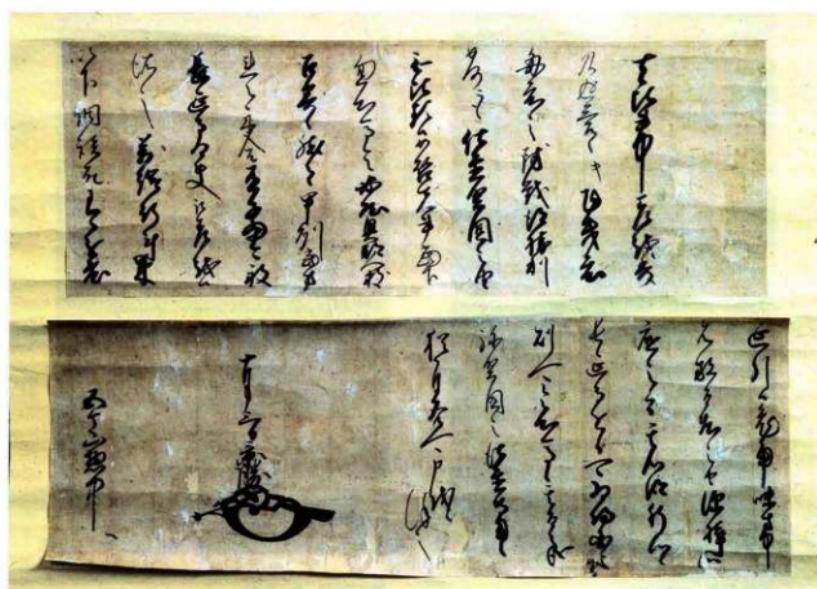
顯如御影〔善徳寺藏〕



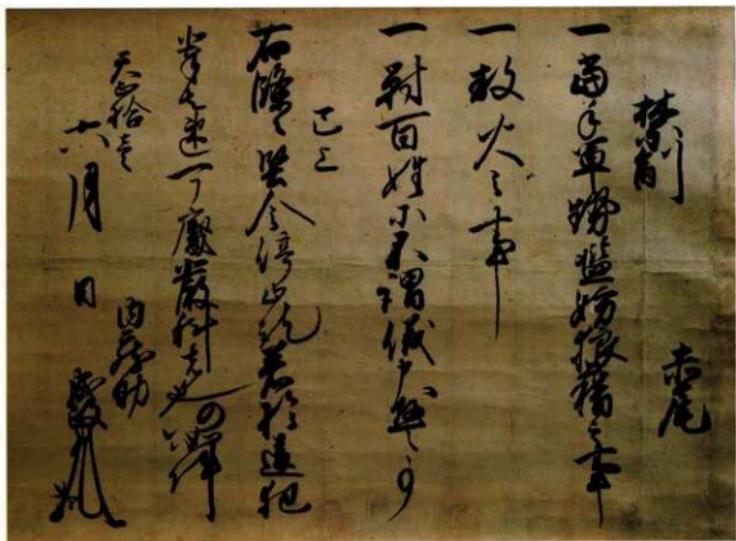
教如御影〔善徳寺藏〕



善徳寺宛 上杉景勝書状 天正10年4月(1582)【善徳寺蔵】読み下し文 26頁



五箇山惣中宛 上杉景勝書状 天正9年10月(1581)【南砺市 山崎甚三郎氏蔵】読み下し文 26頁



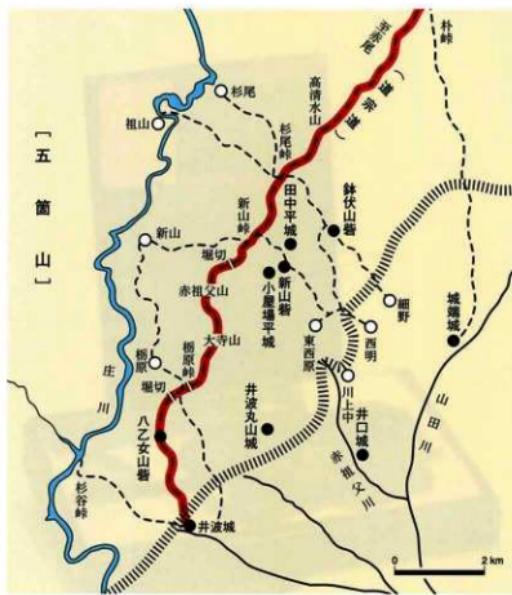
赤尾宛 佐々成政制札 [南砺市 真田治悦氏蔵／33×44.5cm] 読み下し文 26頁



伝 空勝(善徳寺6世) 使用の軍配 [善徳寺蔵]



瑞泉寺から赤尾へ 道宗道（推定ルート）【立体地図】



高清水山地の城砦群と交通路（道宗道は推定ルート）

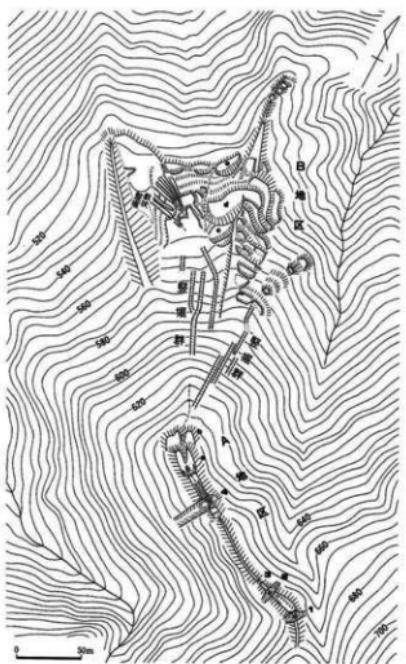
高岡 徹氏「越中五箇山をめぐる城砦群と戦国史の様相」『中世の風景を読む 第4巻』より



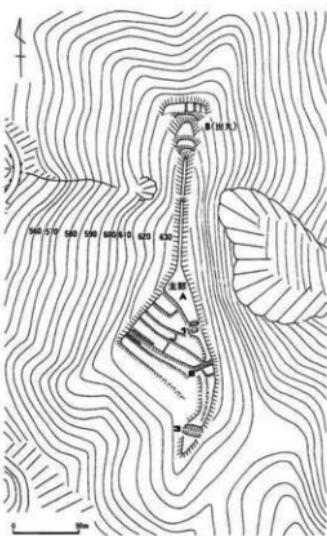
八乙女山砦跡周辺図



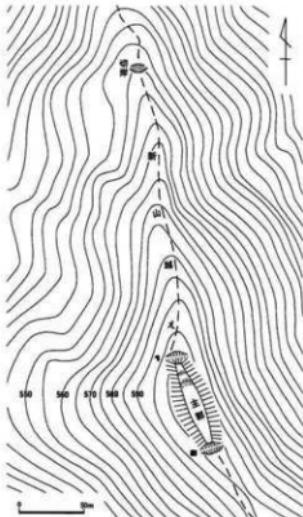
高清水(たかしうづ)山地 八乙女山～大寺山 井口城跡(中央の墓地)付近から



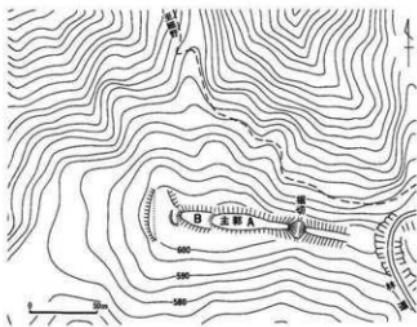
小屋場平城遺構概念図 (a~eは主要な郭、1~4は堀切)



田中平城遺構概念図 (A~Bは主要な郭、1~3は堀切)



新山砦遺構概念図 (1~2は堀切)



鉢伏山砦遺構概念図

### 南砺の城砦群縄張図



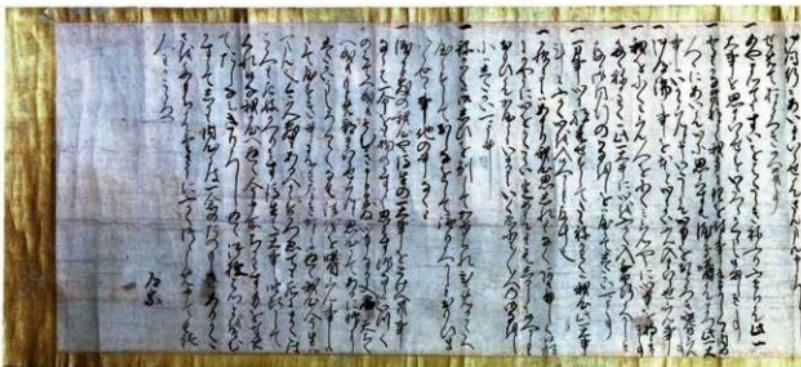
井波城跡の発掘調査・レーダー探査箇所(図面)



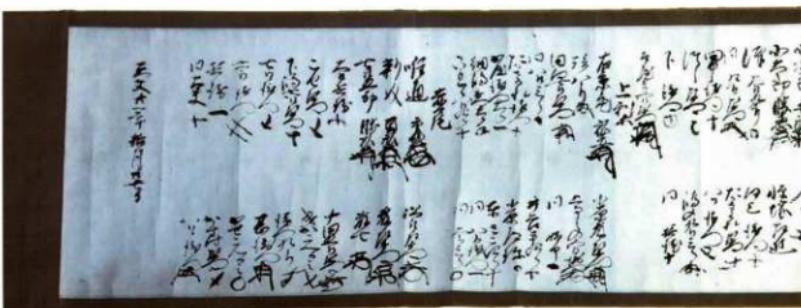
井波城(旧瑞泉寺)跡 航空写真



赤尾道宗覚書(道宗心得21ヶ条)【行徳寺蔵】読み下し文 27頁

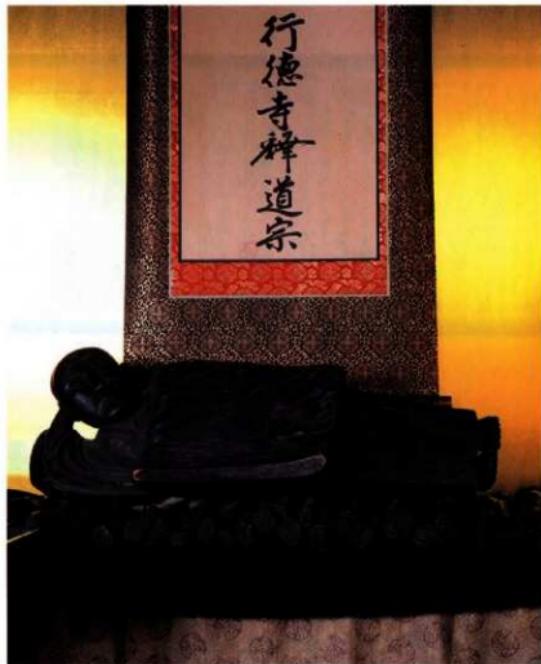


赤尾道宗覚書(道宗心得21ヶ条)【道善寺蔵】/25.2×109.5cm】



五箇山十日講衆申定【南砺市 生田長範氏蔵】/27.5×146cm】読み下し文 30頁

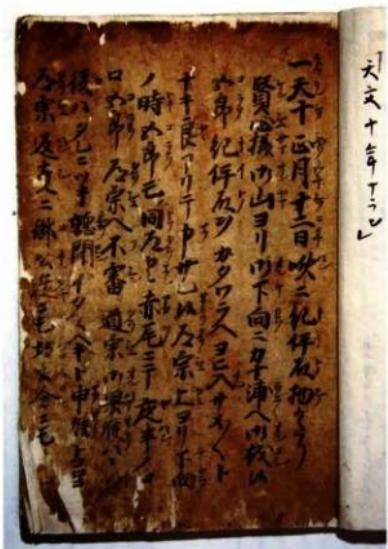




割り木の上の道宗像 [行徳寺藏]



同上 棟方志功 版画



天十物語(冊子) [達善寺蔵]/25.7×17.8cm】読み下し文 32頁



五箇山の念仏道場(県指定)【南砺市上中田】



2



1



4



3



6



5



7

圓淨記（冊子）〔照圓寺藏〕



文明13年(1481)砺波郡一揆関係図

(『富山県史』通史編Ⅱ中世より)



五箇山合掌集落 相倉(下)・菅沼(上)

## 戦国の寺・城・いくさ —南砺の城と人—

### 展示目録

#### 真宗寺院と寺内町の形成

##### ◆越前国吉崎浦近辺絵図 (松平文庫) [福井県立図書館蔵／116×160cm]

現地踏査をもとに福井藩が作成した絵図で、延宝7年(1679)製作と推定。北潟湖に突出する丘陵の先端に吉崎御坊が位置し、その東側に多屋跡とみられる削平地が段々につづいている。土塁・堀などの顕著な防衛施設は認められない。

##### ◆山科本願寺旧迹絵図「山科泉水山絵図」(栗津家記録) [大谷大学蔵／95×83.5cm]

戦国時代の山科本願寺・寺内町の様子を復元した絵図(江戸時代中期以降製作)。第Ⅰ郭(御本寺)、第Ⅱ郭(内寺内)、第Ⅲ郭(外寺内)の三重構造で土塁がめぐらされている。さらに、寺内町西側の西野村の一部も土塁で囲まれていたことが表現されている。

##### ◆塔尾超勝寺・山田光教寺「江沼郡古城跡図」より [加賀市久保幸彦氏蔵／27×1822.5cm]

文化～嘉永年間にかけて大型寺藩土駒沢十歳・宮永桂亭・奥村永世等が調査したもの。宮永・奥村は江沼郡域の地誌の編纂も手掛けている。なおこの絵図は「江沼志稿」にも収録されており、かなり巷間に広まっていた。

##### 山田光教寺跡絵図

光教寺は賀州三か寺の一つ。存立期間は文明18年(1486)～享禄4年(1531)。江沼郡中により取立てられ蓮誓・顯誓が住した。享禄の錯乱の際焼失し、顯誓は越前に亡命し退転した。現在も寺跡からは炭化木・武器片等が出土する。

##### 塔尾超勝寺跡絵図

超勝寺は本願寺6世巧如の弟頓円を祖とし越前藤島郷に草創された。永正3年(1506)の一揆により朝倉氏に敗れ、和田本覚寺と共に加賀に逃れた。塔尾を本拠にした時期は永正3年から享禄4年(1531)に至る期間か。

##### ◆古国府勝興寺古城跡見取絵図 (安養寺古図) 明治14年(1881) [高岡市伏木図書館蔵／40×109cm]

現在、高岡市伏木にある勝興寺が小矢部市末友にあった頃の様子を描いたもの。本堂を中心に堀や土塁をめぐらした城郭化した様子がうかがえる。天正9年(1581)、織田方に属した木舟城(高岡市)の石黒氏によって焼かれたといいう。

##### ◆城端絵図 宝永7年(1710) 洲崎文書 [102×56cm]

##### ◆城端絵図 享保11年(1726) 市指定 [南砺市蔵／256×121.7cm]

城端は真宗廟龍山善徳寺の寺内町として開かれ、市場町・門前町・絹織物産地として発展した。東に池川、西に山田川が北流する段丘上に形成され、北方に砺波平野が広がり、南方には高清水山系の山々がそびえ、峠越えに五箇山の村々へ通じる。

##### ◆井波町絵図 宝永7年(1710) [南砺市井波図書館蔵／89×69cm]

井波町最古の町絵図。500年前の寺内町のなごりを示す。古城と瑞泉寺が記される。瑞泉寺は現在の

台所付近の小規模なものだった。加賀藩は瑞泉寺を中心の町並みにしたくなかった。幕府巡見上使用に作成。上使宿も記入。町家数280軒。文政10年改写、時女喜市郎。

#### ◆ 杉谷山瑞泉寺御坊鋪地絵図 安永4年(1775) [瑞泉寺蔵／169×237cm]

宝曆12年(1762)、瑞泉寺は伽藍草舎を焼失した。翌年、再建計画がなり、東本願寺棟梁の越前笠井若狭がつとめた。本図は安永4年(1775)、その棟梁笠井若狭の絵図をもとに、柴田貞英が瑞泉寺を中心に庄川や周囲の景観を描いた。井波城(旧瑞泉寺跡)の上界がよく表現されている。

## 五箇山の真宗勢力と佐々成政

#### ◆ 井波古城由来書上 宝曆5年(1755)「井波古案記」より [南砺市 井波図書館蔵／23.5×18cm]

宝曆5年(1755)3月、加賀藩の十村を務めた三清村の仁九郎が井波古城跡の由来を書き上げたもの。本願寺5代綽如の建立した瑞泉寺が天正9年(1581)6月、佐々成政の手に落ち、そのあと佐々氏の支城になった様子が記されている。

#### ◆ 顯如御影・教如御影 [善徳寺蔵]

顯如 天文12年(1543)～文禄元年(1592)。本願寺第11世門主。第10世証如の子。子に教如・顯尊・准如がいる。顯如は信長と対立するようになっていた将軍足利義昭と結んで武田氏、朝倉氏、浅井氏、毛利氏などの反織田勢力と同盟を組み、信長包围網の構築に加わる一方、自らは石山本願寺に籠城し、雜賀衆などの友好を結ぶ土豪勢力や地方の門徒組織を動員して信長を苦しめた。

教如 永禄元年(1558年)～慶長19年(1614)。石山本願寺の第12代門主。諱は光寿。第11代門主・顯如の長男。真宗大谷派の祖。1570年、織田信長との間で石山戦争が始まると、父を助けて信長と徹底して戦った。

#### ◆ 伝 空勝(善徳寺6世) 使用の軍配 [善徳寺蔵]

善徳寺6世、空勝が石山合戦に使用したと伝えられる。

#### ◆ 善徳寺宛 上杉景勝書状 天正10年4月(1582) [善徳寺蔵]

天正10年(1581)4月、上杉景勝が善徳寺に宛てた書状。上杉方が魚津城・松倉城を堅く守っていることを述べ、教如の五箇山付近下向に合わせ、直ちに織田方に対し火の手を上げよう求めている。五箇山がこの時期に教如方の拠点となっていたことが知られる。

#### ◆ 五箇山惣中宛 上杉景勝書状 天正9年10月(1581) [南砺市 山崎甚三郎氏蔵／12.2×33.6cm]

天正9年(1581)10月、上杉景勝が「五ヶ山惣中」に宛てた書状。甲斐の武田勝頼との打ち合せのため、越中への出兵が遅れていると述べ、武田方との調整が済み次第、出兵することを伝えたもの。上杉景勝が五箇山の一一向一揆と連携を取っていた様子がうかがえる。

#### ◆ 赤尾宛 佐々成政制札 [南砺市 真田治悦氏蔵／33×44.5cm]

天正11年(1583)6月、越中の平定を目前にした佐々成政が五箇山の赤尾に下したもの。佐々方の軍勢が濫効・狼藉・放火することなどを禁じ、違反する者があれば厳罰に処すと告げている。

#### ◆ 高清水山地の城砦群と交通路 (道宗道は推定ルート)

高岡 徹氏「越中五箇山をめぐる城砦群と戦国史の様相」「中世の風景を読む 第4巻」より

#### ◆ 南砺の城砦群縦張図 高岡 徹氏「越中五箇山をめぐる城砦群と戦国史の様相」「中世の風景を読む 第4巻」より

八乙女山砦 小屋場平城 新山砦 田中平城 鉢伏山砦

- ◆ 井口城跡発掘出土品 室町時代(14~15世紀)【富山県埋蔵文化財センター蔵】  
珠洲窯(壺・壺・片口鉢)、ふいご羽口、土師質小皿(灯明皿)、木簡(卒塔婆)、下駄、櫛、曲げ物底板
- ◆ 井口城跡平面図・発掘写真
- ◆ 井波城跡発掘出土品・五輪塔【南砺市蔵】
- ◆ 井波城跡の発掘調査・レーダー探査箇所 井波城(旧瑞泉寺)跡航空写真
- ◆ 瑞泉寺から赤尾へ道宗道(推定ルート)【立体地図】

## 五箇山への真宗信仰の浸透

- ◆ 赤尾道宗覚書(道宗心得21ヶ条) 2幅 【行徳寺蔵】・【道善寺蔵】/25.2×109.5cm  
通常「赤尾道宗心得21ヶ条」と呼ばれている。行徳寺本は道宗の白筆本と伝えられるが、修復時に2ヶ条分を欠失し、現在19条となっている。ただし上平生田家には21ヶ条を備えたその忠実な写本が残されている。道善寺本は文章の一部や用字に違いが見られる。また活字本の内にも表記の異なる例があり、近世以降における真宗信仰の教化活動に際してこの文章が用いられていたことがうかがえる。

### ◆ 行徳寺 割り木のうえの道宗像(写真)

上平 赤尾道宗 寛正3年~永正13年(1462~1516)

南砺市上平赤尾に生まれる。本願寺8代蓮如に謁見して教化を受けた。明応5年(1496)の蓮如「御文」によれば「道宗の伯父淨徳は蓮如と面識があり弟子でもある。道宗は弥七といい同年には30歳以上下である。6年前の延徳2年(1490)ころから毎年山科本願寺へ上がり、蓮如に謁見して教化を受けていた。しかし道宗が五箇山の人々に念佛の教えを説いても納得しないので、要望によって「御文」を与える」とある。道宗は行徳寺の祖ともいえ、蓮如から受けたとされる蓮如自身の御文案8通を纏った御文集・蓮如筆「御文」1通・蓮如筆「十字名号・六字名号」が同寺に収蔵されている。

道宗は各地へ行って蓮如「御文」を書写している。道宗書写「御文」は軸装で2通、綴りになったものが2冊あり、11通・8通の御文が書写されている。それぞれに写しの正本がどこにあったかが裏書きされ、大和国吉野、小松了珍、山科殿御番衆浜殿などとあり、大和・山城・大坂・加賀へまで足を運んで蓮如「御文」を書写した。そして文亀元年(1501)、自らを反省・改悔した「道宗覚書21ヶ条」を記す。そこには自らの戒めとしていたものが21ヶ条に分けて記され、道宗の人間性・信仰・宗教性を知ることができる。道宗の逸話に、1日のたしなみには自宅内仏に参り、ひと月のたしなみには御開山様の御座候ところ(瑞泉寺)へ、1年のたしなみには山科本願寺へ参詣したという(「実悟記」)。享年55歳。

(富山大百科事典より)

### ◆ 五箇山の念佛道場(県指定)【南砺市上中田】

#### ◆ 五箇山十日講申定【上平生長範氏蔵】/27.5×146cm】本願寺へ縛・糸を獻上(本願寺との直結)

天文21年(1552)10月27日の講中の申定書であるが、①講中の取組みに疎略なきこと②本願寺への志納を怠らないこと③公用銭の不沙汰をしないこと、の3ヶ条を確認している。王法と仏法との間、つまり五箇山衆が領主支配の下での信仰生活を維持していく上での取り決めである。署名者は86名。五つの谷に分類されている。下梨の筆頭者の修理亮乗賀は瑞巌寺祖。赤尾の唯通重家は道善寺祖、椿村の左衛門尉は道珍道場の関係者である。

#### ◆ 回諍記(冊子)【照円寺蔵】

文明13年(1481)にあったといわれる砺波郡一向一揆の顛末について記した回顧物語録。主役である

瑞泉寺は大権門である東大寺領高瀬荘に所在する。そこでは大和の有力国人と越中守護家畠山氏が関わる問題が飛び火して紛糾する事があるため、たとえば嘉吉の乱の余波として、永享年間に一揆的状況が発生したようである。それについての現研究レベルは『富山県史』通史編での金龍静稿である。従来、いささか安易に一揆を瑞泉寺と結び付けてきた感があるが、金龍稿をさらに吟味して、今後再検討されるべきであろう。いずれにせよ、瑞泉寺勝如の「経済的豊かさ」について認識しておく必要がある。そして一向一揆が高瀬荘からの自生的発生ではないことを踏まえておきたい。

加賀国では守護富樫氏が応仁の乱期には一族が東西に分裂して抗争していた。そのため文明7年(1475)の抗争に敗れた加賀北2郡の坊主・百姓・町人らは井波瑞泉寺に逃げ込んだ。そのため文明13年(1481)に加賀守護富樫政親が福光城主石黒光義に瑞泉寺攻撃を要請した。そうした情報を聞いた瑞泉寺住職蓮乗は寺侍竹部豊前守と計って交戦を決し、周辺村落などに加勢を求めた。それに応じて五箇山や山田谷、般若野郷の百姓ら五千人が参集した。一方、富樫政親に応じた石黒勢は医王山懸海寺衆徒千六百人を糾合し、山田川の田屋河原で合戦した。折から瑞泉寺に加勢しようとした加賀山内の湯涌谷衆は二手に分かれ、一手は懸海寺を、一手は福光城を攻撃したため、石黒勢は総崩れとなり、光義は自刃した。こうした記事の後に後日譚が加えられ、天文期(1532~)以降の段階の瑞泉寺、勝興寺の砺波郡支配と結び付けようとする記事内容となっている。

#### ◆ 文明13年(1481) 砺波郡一揆関係図 [『富山県史』通史編Ⅱ中世より]

#### ◆ 天十物語(冊子) [道善寺蔵/25.7×17.8cm]

大正10年12月に修復された折に付された表紙には「古物語」と記し、巻頭に「天正正月十二日」に紀伊殿が物語ったことを筆者が書きとめたとする。この「天十」を修復者は「天文十年ナラン」と注記している。しかし登場人物は、瑞泉寺賢心・証心、梅原賢勝などの瑞泉寺一族をはじめ、赤尾道宗、平瀬唯通、大鋸屋祐道など、天文年間(1532~)から天正初年(1573~)にわたる間に活躍した人たちであるので、天正10年(1582)と解される。しかし同年以降の五箇山と本願寺教如の結託問題などには関説しておらず、石山合戦などとの関わりなどについても記事がなく、真宗の信心などを中心とした書物である。筆者は平瀬道場道善寺の関係者であろう。

#### ◆ 五箇山合掌集落 相倉・菅沼

善徳寺宛 上杉景勝書状

五箇山惣中宛 上杉景勝書状

赤尾宛 佐々成政制札

(天正十年)四月

上杉景勝、善徳寺宛一向一揆を催し、能登・越中一揆と策応、勝に抗せしむにつき書状

(天正九年)十月

上杉景勝、武田勝頼と謀り越中出馬につき書状

天正十一年六月

佐々成政、砺波郡赤尾宛禁制

飛脚到来得其意候、仍向先達柴田山内相

動候処、及防戦、数千討捕之由心地好候、

次彼徒趣中表相動候、魚津・松倉如何ニ

も堅固申付候間、可心安候、然者門跡至

于五ヶ山辺御下向之由候、幸之儀候間、

任兼口之首尾、國中相催、可被揚放火事

肝要候、有遲々<sup>不可然候</sup>、越中・能州

其國御門徒中於發向者、當国差合、今般

凶徒之根切可成之条有其心得、一刻片時

茂早々被揚火先尤候、恐々謹言

卯月八日

景勝(花押)

十月三日

景勝(花押)

五ヶ山惣中

[南陽市善徳寺藏]

[南陽市山崎昌三郎氏藏]

禁制 赤尾

一手軍勢濫妨狼藉之事

一放火之事

一对百姓等不謂儀申懸之事

已上

右条々堅令停止訖、若於違犯革差、速

可處嚴科者也、仍如件

天正拾壹

内蔵助

六月 日 成政(花押)

[南陽市眞田吉亮氏藏]

善徳寺

○この二条は生田家本をもつて補う。

一、これほどのあさましきしんちうをもちたるよと、おほしめし候ハん事

こそ、かへす／＼もあさましく、かなしく、つらく存候、今までの事をハ、ひとすちに御めんをあくをといへとも、かやうなるしんちう

なるものよと、おほしめし候ハんこと、かへす／＼身のほとのつたなき、かなしき、あさましくそんち候、せんじやうもかゝるつたなきしんちうにてこそ、いまかやうに候らめと中、かきりなくあさましく存候、もし／＼つるに御めにかゝり候ても、こゝをあさまし、存候、あら／＼ミやうかなや、こんにちまでうしろくらきをハ、ひたさ

ら御めんをあおき候、おうせにまかせ、まいり候へく候。  
一、もし(今 明 旦)こんミやうにちなからへ候て、のちはうきふさたになり候ハ、  
あさましやとひきやふり、たしなミ候へき事

一、しんちうにおとろき、しミーとなく候ハ、あらあさましや、も

つたいなや、体  
こんしやうへしに、今 生 死  
こ、へしぬとも、此たひ、意

しゃうの一大事をとけまいらせ候ハんことこそ、むしかうごふより  
ののそミ此たひ(音)、まんそくなれと存候て、おもひきりわか身をせめ  
て、たちまちおとろき候へき也、それにもおとろき候ハすハ、これ  
ヲさて、此身ハさて、此身ハさて、御(音)はちをかふふりたるかと存候  
て、しんちうをひきやふり、御(音)とうきやうにあひまいらせ候て、さ  
んたん中候へく候、せめておとろき申へき事

一、あやまつても、すいをはたらき、ねふりふせり候て、此一大事をお

いつくのはへなりとも、そむき申ましきしんちうなり、又たう。  
（天）（三）  
てんちくへなりとも、もとめたつねまいらせ候へんと、おもふ心に  
あるものを、これほどハおもひきりたるわか心にてあるに、おう  
せにしたかい、うろしくらくなく、ほうきをたしなミ候へん事へ、  
（後）  
さてやすきことにてハなきかとよ、かへす／＼わかこゝろごんし  
やうハ一たんなり、いまひさしくもあるへからす、かつへてもしに、  
又ハこゝへてもしね、かへりミす、こしやうの一大事、ゆたんして  
くれ候な、わかこゝろゑ、かへす／＼、いま申候どころちかわす、  
身をせめて、たしなみきり候へく候、かへす／＼御おきて、  
はつとをそむかす候て、しかもないしんにわ、一ねんのたのもしさ、  
ありかたさをたもち候で、けさうにふかくつつしめ申てくれ候へ、  
（法）  
（後）  
わか心へ、

道  
一  
經

○この文書は外題を存しないが通常「赤尾道宗心得廿・ヶ条」と呼ばれている。底本とした行徳守藏本は白紙本で二三回も複数枚あるが、近平蔵の際二番目、その二

ケ条を切断欠失して、現在は十九条を数えるのみである。このはか上平村新屋道遺寺、上平村細田生田長範家にそれぞれ一本の写本を伝えている。この内生田家本は行徳寺本の忠実な写本と考えられるが、「二十一ヶ条を削えている。行徳寺本に欠失した第八、九条は、生田家本をもつて補い「二十一ヶ条」として掲載する。追善寺本は文章の一部、あるいは用字に違いがみられる。また「真宗全書・真宗小部書」には「題中赤尾弥七入迫白城」「十箇条」が收められているが、行徳寺本・追善寺本とは若干異同がある。また、赤尾道宗については「一五五五」、附錄「天物語」を参照。

# 赤尾道宗覚書

行徳寺文書（南砺市）

文龜元十二月廿四日思立候条  
一、こしやうの一大事、□のちのあらんかきり、ゆたんあるましき事  
一、仏法よりほかに、心にふかく入る事候者、あさましく存候て、  
すなわちひるかへすへき事  
一、ひきたつる心なく、おふやうになり候者、しんしゆをひきやぶりま  
いるへき事  
一、仏法におゐて、うしろくらきりやう心あら者、あさましく  
存候て、てをひくおもひをなし、たちまちにひるがへすへき事  
一、心にひきたるもち候て、人のためにわるき事ハまつるましき事  
一、ミやうのせうらんと存候て、人しり候ハす□も、あしきことおは、  
ひるかへすへき事  
一、仏法のかたをは、いかにもふかく奥しんかぶ中、わかミををハ、  
とこまでもへりくたりて、たしなミ可申事  
一、仏法をもつて、人にもちるれんとおもひ候事、かへす／＼  
あさましき事にて候、其心出来候ハ、仏法の信は、たゞこの此  
たひのこしやうの一大事を、たずかるへきため計にて  
一、りひをたゞさす、あしき事の出来候ハん座敷をは、のかれ候へき事  
（通）

一、ともかなきなど、わか身にりをつけ候こと、あるましく候、うち  
の人々にあひ候て、心におもひ候ハすとも、かいふんたしなミ候て、  
まつ此一大事ハいかゞ候ハんと申わたし候て、しんちうをおどろき、  
たしなミ候ハん事  
一、御たうちやうのことを、ほんと心にかいふん入候ハん事  
一、われをにくミ候ハん人を、にくミたおし候ハんやうに、しんちうを  
もち候ましき事  
一、た、ねかわくハ、此一大事に心をふかく入、ゆたんなく候へかしと  
存候、御とうきやうの御なおしをハ、やかてしたかい可申事  
一、ほんし心にしうちやくせすして、たゞ、ねかわくハ、わかこゝろ此一  
大事ハかりに、ふかく心を入候へかしと存候也  
一、かやうに申候ハ、あまりわか心ちうまひしれもなく、あさましく候  
ほどに、かやうに心をかたらい、さため候ても、そのしるしも候へ  
しとおもひ候て、かやうにいま申候、いくへにも、いくへにも人の  
御なをし■ハしたかい可申事  
一、ねかわくハ、御しひを、へつしてかけられ、ひかめるかたへ  
やらすして、おしなをし候て、たまハリ候へかしと、おもひまいら  
せ候事、たの事なく候、  
一、あさましのわかこゝろや、こ■しやうの一大事を、とけへ□□  
ならハ、いちめいをも、ものゝかすともおもわす、おうせならハ、  
（通）

教善（花押）

松尾九郎左衛門尉（略押）

中島大郎左衛門尉（花押）

来数大郎次郎（略押）

松尾左衛門尉（花押）

かこと善入（略押）

仏新生左衛門尉（略押）

利賀谷

又大郎家長（花押）

あへつとう（了願）（花押）

坂上左藤兵衛（花押）

上島左衛門大郎（略押）

細島三郎左衛門尉（花押）

來数九郎左衛門尉（略押）

大豆谷八郎左衛門尉（略押）

さゝれ藏与五郎（略押）

小谷

小次郎安弘（花押）

小太郎勝恵（花押）

沢大郎九郎（略押）

同九郎左衛門尉（花押）

漆原孫左衛門尉（花押）

中畠兵衛（略押）

来数八郎衛門尉（略押）

梨谷小太郎（略押）

あいのくら大郎次郎（略押）

鳴八郎衛門尉（略押）

かのくら大郎（略押）

利賀谷

同殊五郎吉信（花押）

坂上次郎左衛門尉（花押）

上島徳祐（花押）

同大郎衛門尉（花押）

岩淵藤次郎（略押）

鳴又五郎（花押）

同大郎衛門尉（略押）

高沼源大郎（花押）

入谷（花押）

経塚左近

江上衛門尉（略押）

たかさわれ左衛門尉（略押）

六郎衛門（略押）

兵衛（略押）

同大夫（略押）

おせこんかミ（略押）

かうす村左衛門尉（略押）

八郎衛門（花押）

天文廿一年拾月廿七日

# 五箇山十日講衆申定

生田長範氏所藏文書（兩面市）

田中衛門尉（略押）  
つし左衛門尉（略押）

八郎衛門（略押）  
鷗の九郎三郎（花押）

下衛門尉（略押）

同兵衛（略押）

そやま五郎左衛門尉（花押）

上梨

右京亮弘安（花押）

孫八郎（花押）

出向七郎左衛門尉（花押）

同八郎三郎（略押）

たかさハれ衛門（略押）

お屋衛門大郎（略押）

細嶋衛門大郎（略押）

かいもくら八郎次郎（略押）

同大郎三郎（略押）

小原道珍（略押）

井谷平次郎（略押）

回福部（略押）

東さこ次郎（略押）

同八郎衛門（略押）

同大郎三郎（略押）

小原藤左衛門尉（花押）

小原藤左衛門尉（花押）  
上なしの五郎衛門尉（花押）

回福部（略押）

同大郎三郎（略押）

中田五郎左衛門尉（花押）

藤左衛門尉（花押）

藤七（花押）

中田五郎左衛門尉（花押）

成出こんかミ（略押）

衛門九郎（略押）

唯通重家（花押）

次郎左衛門尉（花押）

藤井守二兵衛

新介真弘（花押）

見さ次郎左衛門尉（略押）

申定候条々  
一、十日講依致如在、御坊様曲事之由、  
被仰出候、尤驚入存候、於向後者、  
此人數致如在間敷候、若無沙汰仕候者、  
淨宗可被申上之事、  
致如在間敷之事、

一、京都へ毎年進上仕候御志之系・綿之儀、  
一、御公用不沙汰之儀、曲事之旨、被仰出候、  
尤存候、於向後者、如在仕間敷之事、  
右、条々於否此旨者、翠可致成收候、  
仍定所如件、

下梨

修理亮乘資（花押）

國書下歛（花押）

小来数

北名道尔（花押）

專了（花押） 同中屋（花押）

下嶋六郎左衛門尉（略押）

七郎衛門（略押）

見さ次郎左衛門尉（略押）

大郎兵衛（略押）

こせ左衛門尉（略押）

下嶋六郎左衛門尉（略押）

衛門九郎（略押）

其衛門（花押）

一、五郎賢心サマヘ寺井ハ物ヲケンニ申サレ候、賢様被出召、ナニトケン

二申サレ候や、五郎一切衆生ノ住生ヲ南無阿弥陀仏成就シマシマシ

タルニ、ナニノワツラヒモナシト、カヤウニケンニ申サレ候、賢様キ

コシメサレ、タヽミヲ御打アリテ、マツサウナルコトナリ、ツカレト

モ至極ノサタニテ心ヲエラル、コトナリ、コノヨシ賈得<sup>金持主立き</sup>・証心様<sup>立見主</sup>ヘ御

物語、証様大心御キ、ナサレ、イツレモ言語道断ト御感シ被成候、

一、五郎寺井ヘマイリキヨケンノ讃嘆ヲ教順ノ前ニテホメラレ候、教順

申ニ五郎ハ不足ナルコトヲ御マウシ候、御文ヲ御感候ハテ物語ヲ

ホメラル、ハ不足ナリ、ヤ、アリテ教順・教玄ホトニモノカタリス

ルモノハ当郡ニモ伊他ニモナシ、

一、念ノナイシノ法海ニナカシ、コノ文ノ心ヲ賢勝・賢心様<sup>賢心</sup>ヘ御不審、

心ノ証<sup>立見主</sup>ノ仏地ニ樹タツルアルトコロカ本願ノコトナリ、販命ノ

道理也、難思ノ法海トハ衆生ノ心ナリ、ナカストハ聖教ニ仏願ノ体

ニカヘルトアル心ナリ、マタ御文ニ法水ヲナカストイヘルコトアリ、

ケニ候、ソノ、チ願通・賢得ニ又仰ラレ候、ソレニツケモ女人ノ

身ハ十方三世ノ諸仏ニモステラレタル身ニテ候<sup>ア</sup>、阿弥陀如來ナレ

ハコソカタシケナクモタスケマシ<sup>ア</sup>候、マタ五帖ノ外ノ御文ニタ

スケマシ<sup>ア</sup>候、テ候ヘトアリ、コレヲ願通聽聞アリ、加州ニテ外ノ御

文ヲ尋ラレ候、スナハチ御筆<sup>立見主</sup>ノ御文アリ、ソノ、チコレヲ賢得ニホ

タリ申サレ候、タスケマシ<sup>ア</sup>候、テサフラヘト御座候ニハ、ナニトコ、

ロヲクワヘマウスヘクサフラフヤ、

トナリ、

一、文ノコトクニ心得テ、仏ノアタニナルコトアリ、文ノコトクニコ、

ロエスシテ、仏ノアタニナルコトアリ、

一、五郎ハロヲモキニテ候ツル、マツツ期ニヲシノ、了セイ、ソノ外同行

衆ニ申サレ候、ミナ<sup>ア</sup>此後手ヒロニサタ有マシク候、國ニヒハシシ

ヤナシ、金沢殿ヘモソノ外エモ御參候ハ、御文ヲ聴聞アリ、ヤカテ

下向アルヘク候、ワレラハ井波殿ヘマイリマウストキモ、面ヘマイリ

タルコトナシ、オクヘメシ候時ハ、五日モ三日モ逗留申テ候、御当ニ

人御座ナク候、タヽ一人ナラテハナク候、御当ニ人ナシトサフラフ

ハ、心ヲ得タル人ナシ、一人トハ法心ノコトナリト紀伊殿物語候、

一、ヨシアシノユ、ロハサラニオモハレス、不思議ノ徳ノ顯ユヘ賢様ノ

御哥ナリ、

一、淨近ト云人アラ川殿ノ門徒ナリ、スナハチアラ川ノ岩見ニ親近ノヒ

トナリ、井波ヘマイリ、賢得ヘ談合ネサメニタフトヤトウカヌハ

安心決定ニテハアルマシク候、厥后賢得・証心様<sup>立見主</sup>ヘコノヨシマウシ

アケラレ候、証様キコシメサレ、ソレハワラヘシキコトヲイハレタ

ルヨ、聖教ニ常念仏ノ衆生トアリ、

一、祐達梅原トノニテ、善知識様<sup>立見主</sup>ノ御代ノウチニモ、正意ノアラハル、

御代モアリ、マタアラハレサル御代モアリト申サレ候、ソノ、チ梅

公、証公<sup>立見主</sup>ヘコノヨシ御中ノヤウ、大事ノコトヲ祐マウサレ候、イツ

レノ御代モオナジ御コトナリト梅公御中、ソノ、チ証様、賢得ヘ御

# 天十物語

道善寺文書（南砺市新屋）

大正九年十二月修復

古物語 道宗末孫某

「天文十年ナラン」

一、天正正月十二日晚ニ紀伊殿物かたり

賢心様御山ヨリ御下向ニカナ浦ヘ御越候、五郎紀伊殿ヲカタワラヘ

ヨヒ入サメ／＼トナキ、良アリテ申サレ候、道宗上ヨリ下向ノ時五

郎モ同道申シ、赤尾ニテ夜半ノコロ五郎道宗ヘ不審、道宗御果候ハ、

以後ハタレニツキ聽聞イタスヘキト申候トコロニ、道宗返事ニ、御

公達ニモ坊主分ニモ□賢心サマヘ問マフセト仰ラレ候ツル、イマサ

ラ□存イタシテ候、

（金沢御行跡卷第一）

一、五郎ノ所へ賢心サマ御越ナサレ、今度金沢ニテ広済寺物語

二雜行雜修ハアレトモ、旅陀ヲタノメハスタルヨシマウサレ候、心得

カタク存候、当流ノ御勸化ノ肝要雜行雜修ノ心ヲステ、旅陀ヲタノ

メト御ス、メナリ、慶心ニ御直シ候ヘト申候、慶心斟酌候、ソレハ独

党心ニテ候、タ、御ナヲシサフラヘ、金沢殿ハ御本寺サマ同前ニテ候、

諸国ヨリ參詣ノ衆チヤウモンイカ、ニテ候、其時五郎広済寺ハ常ニ急

仏ノウカムヤウニト御催促候、同、又ノ弥二郎申サレ、広済寺殿常ニ

竹ノ子ノタトヘ御座候、聖教ヲ御引候、賢心様被聞召、ソノ聖教者連

如様御前ニテ焼テ御ステ候、ソノ聖教當分御エイ用ナキ聖教ナリ、

一、道宗三善ノ婦ノコトヲ賢様へ御物語、賢様ナニホトノ覺悟ソト御不審、道宗御返事、惣而道宗カテノ入ヘキ安心ニテハ御座ナク候、コレ

ヲ唯通キカレ候テ、ヤカテ雪中ニ小谷ヘコサレ、スナハチ彼アネニアハレ候、タ、障子ヲ明テ行ヤウニ申サレ候、ソノトキ、スカタコソ嶋

ノエヒスニ似リトモ、心ハ花ノミヤコナリケリトマウサレサフラフ、ノエヒスニ似リトモ、心ハ花ノミヤコナリケリトマウサレサフラフ、

一、道宗賢様へ若松殿ハ冥加ニ御ツキアラフルストマウサレ候、ソノ、

長崎ヘ御牢人有テ、ヲホシメシ合サレサフラフ、

一、道宗ヘ世間ノ公事辺ヲモ賢様御談合候、

一、訓ヲカサリ心ヲカサリ、振舞ヲツククロウテモ、心ニア、トウカマヌ

ハ、ソノセンナシ、

一、三善ノコト賢様御ホメ候、坊主衆ハ聖教ノハシナトヲトハレ候、三

善ハトカウナキヨト仰ラレサフラフ、

一、五郎ノ所ニテ賢様ヒトリコトニ、三善ハ言語ノ覺悟カナト仰ラレ候、

賢得ニ善ハ決定ノ人ニテ御座候ツルカト申上ラレ候、賢様賢得ヲ極

樂ヘマイラレヨカシトオモワレウソト御誕サフラフ、

一、願行ハ南無阿旅陀仏ニ成就シテ、ワレハソノマ、サトルノリナリ、

ノリナリト御座候トコロヲ願通カンジラレサフラフ、

一、淨土無為ヲ期スルコト、候、エフヲ期スルコトニテハナン、法機ニ

テ候カト願通病中ニ談合候、願通尤同心ニテ候、八ノコロ七時ヲ期

スルタウリニテハナシ、唯今期シタナマツルコトナリ、

一、仏ノ功德、凡夫ノ心ニハイナルコトナリ、マタヒツハナレタルコ

カヌ事ヲ中ル、ヨト御説、

一、仏法ノトリサタニミヤウコンヲツカヒ候ハ、不信ノイロニテ御座候

也、御ハタシミヤウコンヲツカフハ仏法ニ不案内ナルユヘナリ、仏

法ニ不案内ナル機ハ往生ヲケマシク候ヤ、中々不案内ナル機ハ往

生トケカタシ、

一、祐ニ新兵衛コノ機ニ本願御成就カト、祐ソレハアシヽ、コノ機ノタ

メニ御成就カトマウシテヨジ、

一、行念、祐ニコトハリヲモテ、義ヲエテ、コトハリノイラヌ御コトカ、

祐ソレハワロシ、コトハリヲモテ、義ヲエテ、コトハリヲハナレタ

ルコトナリ、オナシク行祐ヘ、サテハタ、オンタスケアルコトカ、  
ソレモワロシ、ソノ道理ナレトモ、人ノ不審アルヘシ、タヽアサマ  
シキモノヲ、オンタスケトマウシテヨシ、

一、加賀殿、祐ヘトテモノ御慈悲ナラハタノマストモ、オンタスケナラ

ハ、ナヲアリカタク存ヘキニ、祐サテハタノムトアルヲ、モノムツ

カシクオホシメシ候ヤ、タヽ榮ウモンタニマウセハ、ソノ義理ニア

タル、タヽヨク御チヤウモナルヘキコトカ肝要ニテサフラフ、

一、衣テニツヽミシ玉ノアラハレテ、ウラナクヒトニミユルケフカナ、

一、吹カヘスワシノ山田モカせナカリセハ、コロモノ玉ハイカテシルヘキ、

一、ミカケトヨ法ノ教ノヒカリアル、シンニヨノ玉ハ今ソアラハル、

一、イカニシテ衣ノ玉ヲシリスラン、オモヒモカケヌ入モアル世ニ、

一、ツキニソノ色ナカラメヤシラ糸ノ、ゾムレハソムル法ノヒトスチ、

リ、我ラモ同心ナリ、

一、キケハイヨ＼カタシトハ、信心實固モリノタウリ也、

一、能念所念ヲ体ノウチニ論スルナリトアルハ、名号一体ノ内ニアルト

イフ心ナリ、

一、キリキスニ塙ヲヌルヤウナルコトニテハナシ、コレハ蓮如上人様ノ

御説ナリ、

一、宿ノ字ハムカシトヨム、ヨベトモ云、

一、法藏比丘マシマサハ、衆生ノ往生ニウタカヒモアルヘキカ、法藏比

クハマシマサス、阿旃陀如來マシマス也、

一、機ニ信心ヒトツモ行ヒトツモクワヘス、シカレハ信心ノホカハ、凡

夫ノ思量アルヘカラス、

一、信心ケチタウトハ、信心決定ノコトナリ、

一、高山ノ水ハ深谷ニクタル能アリ、最上ノ法ハクンルヒヲタスクル能

アリ、

一、白中ニモノヲミルニハ、燈火ハイラヌモノナリ、

一、念仏ノ行者、名号ヲキカハ、アハ、ハヤワカ往生生ハ成就シニケリ、

コノ安心地力ノ安心ナリ、

一、修ハツクロフトヨム、コトハヲツクロフ、心ヲツクロイ、スカタ

ヲツクロウ、ミナ雜修ナリ、

一、智惠トハ、一代ノ説教ヲ学スルライフ、オトハ説教ヲ学スルコヽロ、

覓トハサトルコヽロ、

物語、一家ノ内ニモコヽロナキ人アリ、祐ヲシウマノナキユヘナリ、

三川ノトウロトノヘ、道如上人様アソハサレタルモノアリ、ソノ文  
(主因應本末要旨)

二、代六代ノ蓮如、仏法相承ナリト御筆ヲモテアソハレサレ候、

不齊、中々ノ事ウタヽサラニカタシト御座候ハ、オホキニカタキコ

トナリ、

一、アフクトハナニト心得マウスヘキト玄得賢様ヘ御不審、御顔ヲニカ

メラレ、アヽトウカムナリ、オナシク祐不齊、安心決定ノコヽロハ

イカ、御座アルヘキト御申、コレモ御顔ヲニカメラレ、アツトウカ

ムハカリ也、

一、賢様不斷アヽト仰ラレ、或ハウウト仰ラレ、南無阿弥陀仏トマウシ、

コレカ御安心ナリ、

一、梅原殿、今日ハ仏土寺ヨリ客來ヲ得、聖教ヲモ拝申ス、法義無沙汰

浅間敷オホシメシ候ヨシ、賢様へ書状ヲモテ御申、賢様御覽シテ、

形部卿殿ニ是見ヨト仰ラレ候、賢勝ノ覺悟コレホトナヨト御詫候、

一、賢勝ハ聖教ヲソラニテ被遊候、コレ賢心様ノ御機ニアヒマウサス候、

タヽ法味ヲアチワウルコト肝要ナリト御詫候サフラフ、

一、功德利益ノコトイカント不齊、ニツニコヽロエラルヽニヨリテ不齊

ナリ、功德利益一ツナリ、

一、念仏タカクマウサレヨ、タカクマウセハ、キク人モトモニ仏法ニナ

ルナリト、梅原殿賢得ヘ御催促候、是ヲ証心様キコシメサレ、ト、

一、ヲノツカラナルレハシルヤ法ノ道、ミタノチカヒノヘタテナキヨ二、

二、肝要アルコトハ、ヨリコトニハアルマシキ力、信心ニツキテアル

一、旅陀仏ト億念スレハ、ハヤリ極樂ニマウテス、形名頓ニタヘテ生死

ヘキ力、

一、我カタノアサマシキヲ、思シルホト本願ノ不思議力、アカル、モ

ナカク死ス、

一、前住上人、前々住上人ニ、後代ノ儀イカ、御座アルヘキ、御不審ナ

サレ候、タヽトキヽノ御分別次第、シカルヘキヤウニ御意サフラフ、

一、生死ノキツナキレハテ、ト、シカレハ我ヲハ領解ツツ也、

一、仏ハカヽミノコトシ、衆生ハカケノコトシ、善知識ハヒカリノコト

シ、善知識ノ知恩ノヒカリニアハスハ、他力往生ノカケハアラハル

ヘカラス、

一、聴トハサ不テモイフ、聞ノ字ハ心ニキクト云、キキウルトモイフ、

一、限アルトハ、サタマリタルコトナリ、

一、ワコラランコト、アルモ、ヒカマンコト、アルモ、安心ノチカヒタ

ルコトナリ、イサメトハ折檻ノ聲ノ字ヲヨムナリ、

一、十字ノ中トイフハ、十字ノ心也、心トイフハ道ノ辻ノコトシ、

一、冥加トハクラキニクワウ冥ノせウランノタウリ、クラキヲアキラカ

ニナスコヽロナリ、

一、宿善開発ノ機ニテモ、我ラナクハアルハ、善知識サマノ御安心ナ

一、禡トハ、イサ、カトヨム、スコシモハカラヒアレハ、禡爾也、往生

セス、一甚トハスクル、トヨム、

一、塵(音)デン劫トハ、三千大千世界ノ草木ヲハイニ焼テ、ソノ國一ツツ、

ニテンラウチテ、ウチツクシタルヲ一塵(音)デン劫ト云、

一、大地微塵劫トハ、三千界ノ草木ヲヤキテ、諸仏ノコレヲ、ソノ國ノ

草木トエリワケラレタルヲミチン劫ト云、一大地トアルハ、サント

コロナキコトナリ、

一、犯罪隕罪、カクレタルツミニアラハレタルツミ、テヲヲロシテオカス

ツミハアラハレタルタウリ、コノロニオモフハカクレタルタウリ、

一、攝取トハ、ヲサメトル、ムカヘトルトモメリ、

一、法トハ、水ヲサルトカキタリ、イフ心ハホムナウノ悪水ヲサリテ、

清淨ノ心トナセリ、煩惱具足ノ身ナカラ、御タスケトシルカ、ホム

ナウノ悪水ヲサリテトイフ心ナリ、サレハコノコロラウタニ、

ニコロヨニ生テアヘル、施陀ノ願 タノメハスマル ノリノ水力

ナ 二コリエニ 玉ヲオトシテ 水キヨク 玉ヨリスミテ 玉ヲ

コソミレ

二コリエハ凡夫ノ心、玉ハ信心ナリ、

一、智ハシルトモ、サトリトモ、アキラカトモイフ、タトヘハシヤウシ

ヨノホカハシラレスカ、マヨヒノ心、シカルニ矢ハ物ヲトヲスヤ

クリ、矢ヲモシヤウシヤイフリ、口ヲアケ、日ノヒカリヲモ

テモノミル、ノコラヌタウリ也、シヤウシハ凡夫ノ心、矢ハヲシヘ、

一、ヤミノクラヒニ日ノチエラクワヘラル、ニヨリテアキラカナリ、生死ノヤミニマヨヒタル、クラヒ心ニ仏智ヲクワヘラル、ニヨリテ、アキラカナリ、日ノイテタルカ、ヤミノハレタスカタナリ、本願成就トア

ルカ、生死ノヤミノハレタルスカタナリ、

一、有無ノ邪見ヲ破スヘシ、ウモシヤケン、ムモシヤケン、破ハヤフル、

ウトヲモフ心モ、ムトオモフ心ヲモヤフリテ、御タスケナリ、サレハ

トカクノハカラヒノナキカ、ウムヲハナレタルタウリナリ、

一、常見斷見コレヲ外道ノ一見ト云、常見トイフハ、ツネニヨロカタチヲサ

スマイフ、斷見トハヤアチリハイニナリテハ、ナニモノカノコルヘキト

ミルヲイフナリ、コノ一見ヲハナルカ、ウムヲハナレタルタウリナリ、

一、ウトイヘハ、ムカタヽス、ムトイヘハ、ウカタヽス、中道ナレハ、ウ

ムカタツ、中道ウムヲハナル、タウリナリ、

一、信心ハイツクノホカニアアルヤラン、タ、同行參会アリテ、御フミ聖教

ヲヒキヨセ、御タンカウノウヘニアルヘク候、コレカ信心ノアラハレ

トコロカト、

○これは富山県上平村新屋迫寺所蔵の十九よりなる記録であり、巻頭の一文字をとつて「天十物語」と呼ばれている。本来の表紙は脱落しているが、大正元年十二月修復時に付された表紙には「天十物語」と記されている。登場人物等を檢討すると、天文年間から大正初年にかけての記事と含んでいることを考へられる。卷頭には「天正十一年」の表記があり、修復の表紙に天文十年ナフ」と注記しているが、これは天正十年と理解すべきであろう。したがつてこの記録は天正十年以後の成立と考えられるが、善徳寺所蔵の大正四年八月敬如書状にみえる本願寺教祖の五箇山米菴について、何も触れておらないことからすれば、それ以前に記されたものと推定される。なお、原本には全体にわたって漢字に片假名でもつて撰り假名が附されているが、ここでは省略した。

一、信心ヲ取トイフハ、エンブタンコンノ金ヲサシキニ置、ノソミニマ

カセトルタウリ、成就クトクヲウケトルハカリナリ、

一、信地トハ、心ノ功德ナリ、心ニアルクトクナレトモ、自力ニテハシ

ラス、善知識ノヲシヘニテシルヘシ、

一、イトケナキトハ、信ヲエヌ人ノコトナリ、コサカシトハ後生ヲネカ

フ人ノコトナリ、

一、円トハ一代ノ教ヲガクスル心、頓トハサトル心、

一、念声是一念モ十念モ一声モミナ坂命ノコト也、

一、ナニコトニヲキテモ、御説ノコトク申ハケンナリ、タ、御説ヲマ

モルト申テヨシ、別シタル御慈悲トマウスハケンナリ、タ、御慈悲

ト申テヨシ、

一、大像マトニトマルトハ、ウタカヒトケフマントニタトヘタリ、

一、キカントハ、機ニ感スルコ、ロナリ、

一、絶対不二ノ教ヲウケテ、絶体不二ノ機トナル、

一、死記ノ心ナカラトアルモ、死記ノ心ハヤミミテトアルモ、ヲナシコ、

口信心ナリ、死記トハシルシナシトヨム心ノナキコトナリ、

一、又トアルハ、ヒトツコトヲ、ニツニイフコトハナリ、

一、凡夫ノ往生ヲシタ、メ成シタマヘルトハ、コシラヘヲキタリトイフ

心ナリ、

一、障トハサハリトモ、ヘタツルトモヨム、障子カキコシトハ、ヘタツ

ルコ、ロナリ、

日ノヒカリハ本願ニタトヘ、コレ智ノ字ノ心ナリ、

一、凡ノ字ノ心、メヲアイシ、子ヲアイシ、アネミソネミ、ヲシビホシ、

イトシカハイ、ニクヒラタチ、イツハリカサル、夫ノ字ノ心、身ヲ

オシミ、命ヲオシミ、ナケキカナシム、コレカ凡夫也、

一、即得トハ、ソノマ、也、スコシモトリナラス心カアリテハ、ゾクトク

往生ニテハナシ、即トハツクト云ヨミアリ、信決定ノ人ハ、ヤハホト

ケノクラヰニツクナリ、マタ御タスケト耳ニイル、コレカワカ身ニツ

ク未來ノタカラ、ヤケモウせモセス、南無阿弥陀仏也、

一、愚痴トハヲロカニヲロカナリ、

一、煩ハ身ノナヤミ、拙ハ心ノナヤミナリ、

一、歎ハ身ノヨロコビ、喜ハ心ノヨロコビナリ、

一、言語道断トハ、コトハノミチタエタリ、

一、コトノハモタヘテウレシキ心カナ、旅陀ノタスクル法ヲキクミハ、

一、期スルトハ、キワマルトヨムナリ、

一、是人コレヨキ人ナリ、信決定ノ人ヲサシテイフナリ、

一、非人ヒトニアラス、不信ノ人ヲサシテイフナリ、

一、信受ノ体ハキクカ体ナリ、

一、ナシハカラウ心ニタニハナルレハ、マイルハカリ、

一、ツアルモノヲ、ツツリテスツレハ、アトカツナリ、自力カツ

スタレハ、信心一ハカリナリ、ヨルカナケレハヒルハカリ、ハカラヒ

カナケレハ他力ハカリ、



# シンポジウム 発表要旨



# 真宗の浸透－瑞泉寺と五箇山－

久保尚文

## I. 越中の真宗史概説

親鸞は京都黒谷で淨土宗を説いた法然の弟子である。しかしその弟子の中に他を説いていたが、その弟子であった親鸞も建永2年(1207)に越後国府(現上越市辺り)に配流となった。それ以前の僧侶に認められていなかつた結婚を、親鸞は師法然の許しを得て公にした。その妻が越後に所領を持っていた下級貴族三善氏の娘恵信であり、親鸞の配流生活を支えた。親鸞の罪が許された後、家族は関東を経て京都へ登るが、恵信は所領經營の必要もあるため越後に住み、その地の親鸞ゆかりの弟子たちとともに信仰生活を続けた。

そうした恵信と結びついた信徒たちには真砂などに住む水運の輩もあり、越中の現白岩川河口部の水橋(富山市)や流域の人々と交流し、信徒として「水橋門徒」を育んだ。そうしたうちには配流の際に道中の親鸞と出会ったと伝承する人々もあり、越中で最も早い親鸞門徒集団であった。恵信尼の死後は彼らと本願寺の人々との縁はしばし薄れた。しかし親鸞の曾孫覺如が本願寺三代住職となって所縁の信徒掘り起こしに着手し、本願寺発展の基礎を築き始め、その嫡男だが父から疎まれた存覚が恵信尼ゆかりの水橋門徒らを傍流常楽台(寺)門徒として組織した。延文五年(1360)ころである。

一方、本願寺五代住職(留守職)となった綽如が越中を訪れ、小矢部川流域の野尻時衆杉谷慶喜らの支援、同学の三河国の淨土宗法藏寺の堀雲らの援助を得て、明徳元年(1390)、現井波城の地に瑞泉寺を建立した。瑞泉寺は本願寺の深縁寺院として成立し、やがて本願寺八代蓮如に「北國の開山は當寺なり」と評される本願寺一門中で高い格式を誇った。だが瑞泉寺は、本願寺六代巧如でなく、弟の越前荒川興行寺周覺(玄真)系住持寺院として繼承され、血縁上は本願寺直系から次第に離れた。ただいずれも九頭竜川や砺波川(庄川・小矢部川水系)中流域の要衝に立地し、河川舟運のもたらす富に支えられて成長したと考えられる。

一方、蓮如が本願寺八代住職となつた頃の本願寺の勢力はごく小さく、蓮如は次々と誕生した子どもを北陸の縁者を頼って養子に出した。当時の井波瑞泉寺は周覺の娘勝如に伝えられ、本願寺存如の弟である如乗を婿養子とし、安定した寺院経営を営んでいた。如乗は加賀に入った二俣に本泉寺を新設し、その娘如秀に蓮如次男蓮乗を娘婿とした。こうして蓮如の吉崎坊発展とともに瑞泉・本泉の両寺も著しい発展を遂げた。しかし蓮如の吉崎退去すると、吉崎の港湾機能を扼する鹿島にいた若年の蓮如四男蓮誓も窮屈であろう。蓮乗は蓮誓を迎えたが(この件は「反故義書」にある)。金龍静「越中一向一揆考」は文明3年の蓮如の吉崎下向以前と推測しているが、いかがであろうか)、蓮乗自身が病臥したので(「荒巣山勝興寺系譜」は文明11年とする)加賀境の土山坊を蓮誓に委ねた。先立つ文明元年にはまだ襁にいる蓮如七男蓮悟を二俣に引き取り、成長後に娘如了と娶わせ、本泉寺を継がせた。こうして瑞泉・本泉寺は、基盤は姑勝如尼が築いたが、蓮乗の下で新たな蓮如直系寺院としての性格を加えた。

したがって蓮乗が病臥した後は、姑としての勝如尼の意向が強まったであろう。だが、やがて蓮乗の弟たちは瑞泉寺からの自立をはかった。蓮誓は越前国境に近い山田に戻るとともに、上山坊を次男の実玄名義とし、将米に備えて寺基を高木場に移した。勝如尼が亡くなるとともに高木場坊は瑞泉寺からの自立を達成した。永正14年(1517)に勝興寺号を許され、本願寺実如兄弟の一門寺院としての基礎を築いた。それは本願寺が一門一家の制を敷く直前であった。一方加賀二俣本泉寺を継いだ蓮悟は、長享二年加賀一向一揆が富樫政親を滅ぼして強勢化した加賀一向衆を加賀教團に組織し、同母兄で本願寺九代住職となった実如に協力した。やがて若松本泉寺に移り、加賀一向一揆の司令塔として君臨した。

なお蓮誓の次男実玄に継がれた勝興寺は、妻妙勝が本願寺十代住職証如の最上位の伯母の立場となり、

越中での蓮如直系随一の寺院という不変的地位を確立した。その与力である配下の坊主・門徒衆は「越中衆」と称された。一方の瑞泉寺は、上記のような並びない北陸の山嶺寺院としての門地は勝興寺にも勝る。だが蓮乗は娘如了を弟蓮悟に娶わせて本泉寺を繼がせ、瑞泉寺を蓮乗直系に継がせなかった。そして妹了如(蓮如九女、蓮悟の同母姉)を養女とし、越前興行寺より蓮欽を婿に迎えた。本願寺との関係は緊密だが、男系上は別家である。存在基盤を興行寺系血脈に求めつつ、世代交代により本願寺色を薄めないように、本願寺との血縁関係維持にも努めることになる。しかし勝興寺の発展の一方で、瑞泉寺与力團は小矢部・庄川上流域つまり南砺波地域の門徒「河上衆」に限られた。

文明13年(1481)一向一揆の史料「闘諍記」は、末尾にA「利波郡は瑞泉寺領と成けるなり」としつつ、さらにB「軍済て後、山田川の事なるか、西は安養寺領と定ける、川東は瑞泉寺領也」とある。A・B両引用文は互いに矛盾するように見える。しかし私は、Aは文明一三年直後を示す本文記事であるが<sup>4</sup>、Bの記事は、安養寺つまり高木場坊が永正14年(1517)に勝興寺が寺号を獲得し、上記のような経緯を経て同寺が越中教団の主導者となって以後に生じた状況を、原文に傍注として書き加えた注釈であると考えている。本文扱いされるようになったのは後の書写の際であったと思われる(旧著「勝興寺と越中一向一揆」)。

ともあれ文明13年一揆は瑞泉寺を巻き込んだ地域紛争として実在し、医王山や石黒氏に打撃を与えたであろう。蓮乗を継いだ蓮欽(明応5年(1496)、二八歳で没)は六子を残したが、二子実順(河内出口光善寺へ)を除き、立野教宗・梅原賢勝以下の兄弟姉妹はほぼ井波一福光一二侯ルート上つまり河上郷域に居た。本願寺証如期における瑞泉寺一族は山田川西部地域に展開していた。まさに文明一三年の勝利を裏付けているような分布状況である。当時の瑞泉寺一族は河上郷一帯と深く結びついており、山田川をもって瑞泉寺領と安養寺領を区分する解釈はこの世代以前に登場するはずはない。彼らの世代以後に別途の事情により生じたその解釈が、写本に投影されたのであろう。

なお「闘諍記」にいう「領」とは幕府・守護大名的公権レベルの領域支配つまり「門徒領国」形成を意味せず、門徒の「志」の範囲を示す与力團であろう。「闘諍記」が瑞泉寺与力團の「河上」を山田川以東とする状況は、早くとも大小一揆以前にはないと思われる。

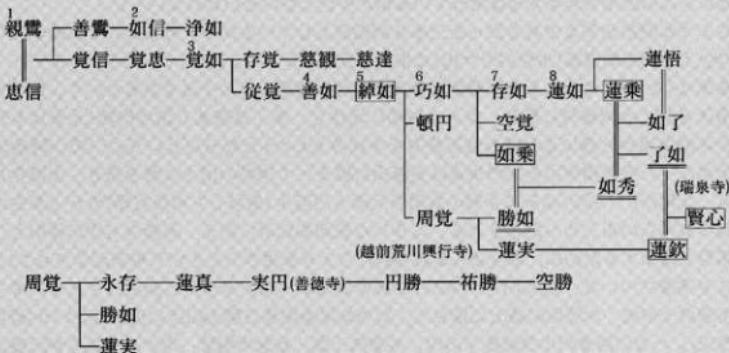
以上では享禄4年(1531)の本願寺証如方の門末支配権確立段階までの瑞泉寺をめぐる状況について検討した。勝興寺や瑞泉寺が軍事力をもって上杉謙信と戦い、また織田信長との石山合戦に参じるのはその後のことである。そうした俗世の戦争つまり幕府・大名と同等の立場での「公戦」の担い手になったのは、永禄2年(1559)に本願寺顕如が門跡に補せられて以後、ことに永禄8年の対上杉謙信との開戦決定以後であったと考えられる。

それ以前の戦いは、長享二年加賀一揆にても永正3年(1506)北陸一向一揆や大永元年(1521)長尾為景戦争にしても、下剋上といわれる公権への反抗つまり上一揆の範疇にあった。戦争する正当性など微塵もなく、自衛の範囲内しかなかった。永正3年一揆において蓮悟が一揆衆に求めたのは、「かかるたくひもなき弥陀の法をつぶされ候ハんする事」に対する「捨身命」の行為であり(乘誓寺文書)、決して権力奪取の要求ではなかった。大永三年の長尾との停戦協定である和議も、一揆衆の北陸の守護大名支配体制への復帰約束、通行制限の解除に限られ、支配体制が改訂されることとはなかった。

このようなことからみて、永禄二年以前の一一向一揆は局地戦としての「いくさ」であり、決して国支配争奪戦争ではなかった。永禄二年あるいは同八年以前の砺波地域の政治・社会状況を「戦国時代」ということには、いささか抵抗感をいたいでいる次第である。

## 親鸞から蓮如までの本願寺系譜

(名前左上数字は本願寺留守職・継職順位。□囲みは瑞泉寺住職)



### \* 蓮如の妻と所生の男子たち

①如了(～1455 幕府政所所司系伊勢下総守貞房の娘)

--- 1 順如 2 蓮乘 3 蓮綱 4 蓮誓

②蓮祐(～1470 如了の妹)--- 5 実如 6 蓮淳 7 蓮悟

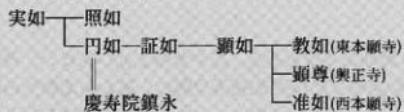
③如勝(～1478 本願寺家女房)--- 女兒二人

④宗如(～1486 姉小路昌家の娘)--- 8 蓮芸

⑤蓮能(～1518 畠山治部大輔政栄の娘)

--- 9 実賢 10 実悟 11 実順 12 実孝 13 実徳

### \* 実如以後の系譜



近江近松・伊勢長島顕證寺蓮淳--- 勝興寺実玄室北向妙勝(長女)

--- 超勝寺杉向(二女)

--- 慶寿院鎮永(三女)

## II. 赤尾道宗と五箇山の真宗信仰

### a. 古史としての南北朝期伝承

山村における家の盛衰という問題について、その浮沈の激しいことを指摘した大間知篤三は、その原因として、病気・死亡・怠惰といった事態のほかに、相場への手出しと失敗、新事業の失敗、保証人となつての連帯責任、農産物価格の下落、政治運動への参加、水難火難などを挙げ、次例を挙げている(『山村生活と家』柳田國男編「山村生活の研究」昭和12年刊所収)。

富山県上平村には「赤尾角淵、向は平瀬、下の漆谷高桑屋」と昔の赤尾谷の三旧家を唄つた歌が残っているが、この三家とも今は衰えてしまつてゐる。同地は加賀蒲の煙硝製造地の一つであり、高桑屋はそれで非常に栄えたのであるが、ご維新とともにその仕事がなくなり、しかも火災に遭つて衰えてしまつた。他にもこの煙硝で栄えて今は困つてゐる家が少くないといわれてゐる。

このように明治初年まで有力だった三家を衰微例としているが、それについて高桑敬親『五箇山誌』や『平村史』上巻の石崎直義「中世の五ヶ山」に次の紹介記事がある。

高桑家は『太平記』に見える南朝勢新田義貞方の将畠時能の弟の子孫であるといふ。敗戦後の時能直系は、潜伏を経て大鎧屋村に移り、さらに城端に定住し、多くは越前万法寺門徒(元米は本覚寺系)。近世初頭の本願寺東西分派により西方は万法寺を手次寺とした)となつたといふ。一方、時能の甥の大夫房快舜の弟だった高桑勘助由左衛門快直は五箇山に留まつて漆谷の山上に砦を築き、土豪化したといふのである。文亀2年(1502)にその末裔の高桑新兵衛入道道永(還俗して市郎右衛門)が上梨白山宮を祭り、平地域の高桑氏の祖となつたとされる。こうした後南朝伝承に加え、本願寺五代の継如も、五箇山山中の南朝勢を懷柔するために、幕府要人斯波(義将)方より派遣されたといふ解釈が示されている。

次に平瀬家について、応永31年(1424)に南朝遣臣姉小路が木舟の石黒重行とともに挙兵したが、斯波方の朝倉・甲斐・小笠原の諸士に敗れて、石黒は尾張国春日郡山田庄に逃れたといふ(近世尾張徳川家中石黒氏)。一方の勝者の小笠原配下の内、平瀬権三郎・嘉念坊明誓・内ヶ島季氏らが五箇山方面に留まり、居館を構えたとされる。

さらに、暦応3年(1340)に角淵氏が西赤尾丸岡城に一時後醍醐天皇の子宗良親王を迎へ、また下梨瑞願寺の高田氏が内ヶ島系で南朝所縁の家系だといわれる(高桑敬親説)。

しかしいずれも南朝伝承に依拠した牽強付合であり、証明困難であり、事実ではない。たとえば岡村守彦『飛騨史考』が指摘しているように、幕府奉公衆の内ヶ島の祖先為氏が信濃より飛騨へ移住したのは寛正年中(1460~66)以後である。その点、信憑性の低い飛騨真宗史料『岷江記』により、寛正二年(1461)に將軍義政が越前朝倉氏に飛騨および五箇山への進攻を命じ、朝倉が代理として飛騨白川の内ヶ島・平瀬・市村らに挙兵させて飛騨・越中を攻めたとする説も認めがたい(『平村史』)。このように個々の記事は信憑性を欠いてゐるといわざるをえない。だが蓮如の真宗波及以前の五箇山に土豪的「村殿」たちがいて、そうした祖先伝承を作り上げていたことについては疑う必要はないであろう。

### b. 五箇山への本願寺方浸透

aにみたように五箇山への真宗浸透について紹介関与説もある。だが事実とはいえない。角淵氏や平瀬氏、内ヶ島一族の高桑氏らが五箇山において村殿化した15世紀後半以降に、折から北陸への影響力を強めた蓮如と関わって浸透してきたのであろう。しかしその伝播ルートは必ずしも平野部から庄川を遡つたのではない。また飛騨白川から五箇山に入ったのでもない。五箇山に真宗が伝播する以前から飛騨白川郷鳩谷には嘉念坊がおり、白川善後門徒と称されて照運寺を造り上げた。だが五箇山には同門徒であったことを示す法物裏書類は一幅もない。では真宗は五箇山へどのように入ったのだろうか。金龍静は越前大野郡から飛騨白川ルートにより越前和田本願寺勢が五箇山に入ったと予想した(『富山県史』通史編中世)。一方、大村忍はその伝播ルートを加賀一ノオ峠—赤尾谷—下梨谷—城端大鎧屋とした(『平村史』)。いずれも和田本願寺の動きがカギとなるが、大村説が妥当であり、さらに金龍教英が繼承敷衍している(『利賀村史』)。

九頭竜川南岸にあった和田本願寺蓮光は、文明7年(1475)に蓮如は吉崎坊退去の際、同坊留守職とされ、北陸本願寺門徒を束ね、在地坊主の意向を取り次ぐ権威を与えられた。だが瑞泉・本泉寺の勝如尼・蓮乗の庇護下で成長した北陸居住の蓮如の子どもたちなど、蓮如血縁の本願寺直系寺院は本願寺下

でなく、文明年間後半以降にはさらに自立を遂げた。また加賀四頭衆（木越光徳寺、吉藤専光寺、磯部勝願寺、鳥越弘願寺）など長享2年（1488）加賀一向一揆に中心的役割を果たす有力在地系寺院も割拠している。本覚寺自体が加賀で勢力を伸張させることは容易ではない。木越光徳寺などが本覚寺下分とされる史料がある（本願寺文書）、享禄の錯乱（1531）以降の本願寺証如末一願頃の状況である。では加賀や越中での本覚寺の伸張はどのようにして進んだのであろうか。以下、本覚寺と五箇山問題からは離れるようあるが、北陸門徒を取巻く状況の変化をたどっておく。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

長享2年一揆によって本願寺門徒は新たな状況に置かれた。「お叱りの御文」により、蓮如による加賀国坊主・門徒衆統制が必須事項となってきた。当面は「御文」による教化活動の推進が前面にでる。だがそれを在地寺院に対して組織的に行うために、蓮如名代としての本覚寺の役割は大きな意味を持つようになったと思われる。

次に蓮如の再婚問題の影響がある。周知のように長享2年一揆以後の本願寺は幕府管領家の細川政元を支えとし、山科本願寺を営んで安定期を迎える。本願寺留守職も五男実方に継がれた。だが文明18年（1486）に妻宗如を亡くした蓮如は細川のライバル畠山方の蓮能と再婚し（北西弘「一向一揆の研究」）、隠居と称して大坂坊を造営して移った。やがて蓮如死後に発生する、永正3年に実如・蓮悟方が加賀勢を動員して敢行した①大坂坊攻撃、②畠山分国越中攻撃、③朝倉方越前攻撃、の三問題発生の条件が生まれ出された。

一見蓮如再婚問題は本覚寺・五箇山問題と関係なさそうである。しかし永正3年一向一揆により本覚寺は越前を追われて加賀に入り、五箇山に進出することになる。本覚寺にとって大きな問題であるが、それ以前に本願寺そのものの歩みを決定づける問題でもある。単純明快な問題であるにもかかわらず、従来は信仰対象である本願寺内の不和問題としてタブー視されたのであろうか、言及されることはほとんどなかった。だが以後の本願寺史理解に大きく関わる問題である。経過を簡略にみておきたい。

すなわち蓮能所生の子どもは五男二女に及び、男子はすべて「実」の一字を持つ。実如を含む蓮乗より蓮悟までの伊勢氏娘所生の子弟つまり山科本願寺勢にとって、蓮能所生の子供たちの登場は大きな不安材料であった。蓮如晩年所生の異母弟たちを、実如の猶子身分と定めたのである。しかし異母弟たちのいる大坂坊は畠山氏の影響下にあり、山科本願寺の実如らと親しい細川政元方に対抗していた。そこで加賀二俣本泉寺で病臥している蓮乗は別としても、加賀所在の蓮綱・蓮誓・蓮悟は結束を固め、松岡寺・光教寺・本泉寺三か寺体制の構築強化に努めた。彼らは加賀教團を教化組織として形成するだけでなく、本願寺を実如中心の組織としようとしていた。そして「永正3年一向一揆」指導過程で、三か寺は加賀において強力な門徒指導体制を築くにいたったのである。

ついで実如以下は、実如中心体制の安定化のために、永正16年に実如母姉妹所生の兄弟による本願寺一門一家を最上位に置く寺格制度を不改常典として定めた。その前年には一門一家が在地門徒との摩擦・紛争の発生を防ぐために「新坊建立停止令」を敷き、組織防衛対策を講じていた。だが本願寺では後継者円如の死、孫証如の就任という想定外の事態に見舞われ、内局の世代間対立である享禄4年（1531）の錯乱、大小一揆という一族争乱を経なければならなかつた。とはいえたが、本願寺が依拠する幕府・守護方との関係は、実如段階で確定された協調路線であり、証如期の大小一揆は家族内紛争に過ぎなかつた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

本願寺の北陸在地寺院掌握は、以上の本願寺の血縁相続的問題の経過を背景として、実務的次元で進んだ。五箇山と本願寺の関係を示す初見史料は長享2年加賀一向一揆直後の延徳元年（=1489）9月25日の、越前と本願寺門徒利波郡坂本保某宛阿弥陀如米絵像（山本五兵衛蔵）である。その翌年から赤尾道宗の山科本願寺参詣が恒常化する。だが吉崎留守職本願寺の五箇山への真宗教化が、道宗の蓮如直参的動きと平行して始まったわけではない。飛びぬけて早い坂本保への手次事例は、坂本保某方が本願寺に結縁したことを示すが、本願寺自体の五箇山への直接進出を示すものではない。次の越中への本願寺手

次事例は、明応7年7月28日付け、宛先不明の実如差出の本仏像附属状(入善町長田氏蔵)である。だがこれにも本覚寺自体の五箇山・越中進出を読み取れず、直接的進出は今少し遅れる。

以後の本覚寺は苦難に見舞われた。同寺は永正三年一向一揆の結果越前を追われて加賀に入った。よって越前への復帰は悲願となつたが、政治状況からみて容易ではない。一方立場上、加賀における住持の坊主・門徒衆との摩擦は避けなければならない。永正15年には本泉寺蓮悟と争論し、本覚寺蓮悟は身分を弁えない者として実如より破門に処せられたこともある(座拾鈔)。このように本覚寺の加賀国内での勢力扶植は困難であった。代わってその進出地は本願寺教線新開地としての越中に求められることになった。ただし、蓮乗、蓮綱、蓮誓、蓮悟兄弟の教線エリアはまず除外される。

また、永正期以降の越中での真宗教線拡大地をみると、加賀・越中国境地帯の小矢部川中下流幹や氷見方面には加賀四頭衆が進出していた。やがてその上に越中における唯一の本願寺直系寺院とされた勝興寺が立ち、その配下とされた地域の坊主・門徒衆を「越中衆」の名で統轄し、寺院集團として編成していった。本覚寺はそうした地域も避け、永正6年頃に本覚寺は加賀山内衆と結びつつ越中五箇山に入った。次掲の実如下付「阿弥陀如来絵像裏書」に見る本覚寺名表はそうした本覚寺の動きを如実に示している。そしてそれが<sup>1</sup>上記のように「真宗の道」と表現されることになった現象だったのである。こうして五箇山を席巻した上で、本覚寺はついで山間部のルートを介して婦負郡に進出し、奥羽丘陵部に寺基を定めたうえで、さらに常願寺川扇状地の太田保地域へと歩みを進めた(浅香年木『小松本覚寺史』、金龍教英「越中における講の成立とその後の推移」「越中念仏者の歩み」)。

真宗寺院が新天地へ進出するには、当然その地での布教活動を容認する一定の政治・社会状況が必要であった。永正期の地域状況を見ると、永正17年の神保慶宗滅亡後における守護支配の空白状態であった(久保「両畠山家連和と越中守護代更迭」『富山史壇』144号)。つまり神保慶宗は射水・婦負両郡守護代権を否定されて滅ぼされたが、生き延びた後継者神保長職は小島職鎮に擁せられて婦負郡域において再興活動(非公認)を進め、結果的に太田保・莊地域に進出した。それは本覚寺の越中中央部進出にとって十分条件であった。神保長職に寄り添い、また本願寺と細川氏との親密な関係を背景として、本覚寺は細川家領大田莊城に進出した。本覚寺方の尖兵は金乗坊(現富山市中市光明寺)であった。神保氏も本覚寺方と提携して太田保地域に勢力を拡大し、やがて富山城を築城して守護家畠山氏方の承認を獲得し、守護代として復権を遂げることになった。神保長職と本覚寺とは勢力拡張運動を進める過程で、相乗効果をもったといえる(『大山の歴史』拙稿、および「細川賀領家領越中国太田保をめぐる諸問題」上・下『富山市日本海文化研究所報』25・26号所載久保稿その他)。

#### \* (超勝寺下分并) 本覚寺下分書上(本願寺文書)

##### 本覚寺下分

加州	木越光徳寺	宇坂本向寺	英田広濟寺	次舞光専寺	押野上宮寺	三人			
	宮永極楽寺	安宅勝樂寺	スナコタ徳勝寺	木越光琳寺	同光専寺	宮保聖興寺			
	觀音堂西福寺	松任本誓寺	赤尾超光寺	越前河尻西光寺					
越中衆	中村願称寺	水島勝満寺	光西寺	道林寺	中堂寺	円照寺	永照寺	大徳寺	光慶寺
	光福寺	トモサカ金乗坊	光明寺						

#### \* 実如下付「阿弥陀如来絵像裏書」に見る本覚寺名(金龍教英「真宗と五ヶ山」「利賀村史」)

延徳元・9・25 利波郡坂本保	永 正 6・6・9 赤尾椿村积道珍(篠塚下)
永 正 6・6・□ 赤尾成出积明善(篠塚下)	永 正 9・3・28 上梨内小原村积空了
永 正 15・5 五箇山荒山村积了順	永 正 上梨村积円西

### c. 赤尾道宗と五箇山衆

bでみてきたように、五箇山における本覚寺の位置は、地域寺院の統括者的役割であった。それに対して、本覚寺下としてよりも、本願寺蓮如に参じて昵懃となり、本願寺直參としての立場を獲得して存立基盤を構築したのが赤尾道宗ゆかりの西赤尾行徳寺であり、また本覚寺下道場であるが道宗伝承を伴って成長した新屋道善寺の場合である。

赤尾道宗(およそ寛正3年=1462~永正13年=1516)は、明応5年(1496)閏2月28日付けの蓮如御文(弥七御文)によれば、弥七(道宗)の伯父淨徳は以前にすでに蓮如と面識があったという。当時まだ30歳未満であった道宗だが、延徳2~3年(1491)ころから毎年山科本願寺に赴いていたという。しかし明応5年当時に道宗が越中(五箇山方面)国人らに「真宗の安心論」つまり真宗教義を説いても納得を得られなかつたという。人々に蓮如の名は知られていても、必ずしも真宗の教えが浸透していたわけではなかつたのである。

こうした状況から見て、淨徳と蓮如の接点は文明元年以降(年表参照)であろう。井波方面での教化活動はその時点で始まったであろうが、五箇山への浸透は遅れていたと考えられ、この段階では本覚寺方の活動もまだだったであろう。道宗の逸話として、一日のたしなみは自宅内仏に参り、一月のたしなみに御開山(親鸞)様の御座候ところ(瑞泉寺)へ、一年のたしなみに山科本願寺へ参詣したといわれる(『実相記』)。文明元年に親鸞絵像が下付された井波瑞泉寺へ毎月参詣したという同寺への崇拜の念は、「天十物語」にも「道宗御果候ハハ、…賢心サマヘマウセ」とあるように、道宗の確固たる認識であった。山科本願寺参詣も同様であろう。しかし明応5年からのこといでいえば、道宗が蓮如との接点を重視していたことを考慮すると、年に二、三度あったといわれる道宗の上洛目的には、山科本願寺参詣だけではなく、蓮如が滞在した大坂坊参詣も加わったであろう。同年秋10月に大坂坊建立に着工するので、以後は道宗の訪問先に大坂坊が入った可能性は高い。

後世に妙好人と讀えられ、またさかんに蓮如の御文を各地を廻って書写した赤尾道宗は、五箇山衆の信仰生活に大きな影響を及ぼした。その内省に基づく改悔、そして教えとしての二十一か条の「道宗覺書」が、角瀬山の山号で呼ばれる西赤尾行徳寺と、本覚寺下道場で平瀬唯通道場の跡と思われる新屋道善寺の両寺にそれぞれ伝えられ、道宗との所縁が知られる。同寺に所蔵されている「天十物語」には、道宗死後の五箇山衆が井波瑞泉寺賢心らの指導に従って信仰生活を深めていたことがうかがえる。

「天十物語」成立については天文10年説の可能性は残るが(千秋健治「瑞泉寺と門前町井波」)、別記では天正10年説に従った。内容上は天文前期に遡る記事が多く、永正13年の道宗没年に近い記事も多いが、五箇山においては半世紀を経ても、信仰を持続する力として道宗伝承が脈々と生きていたことをうかがわせている。そして『富山県史』で金龍静がいうように、五箇山の人々は、本寺たる本覚寺や専光寺に対する以上に、瑞泉寺一族及び河上衆と深い関係にあり、同じ越中の勝興寺圏内の人々との交渉以上に「真宗の道」を通じて加賀の人々と深い交渉を持っていたことをうかがわせている。

ともあれ注目されるのはやはり瑞泉寺賢心の存在である。賢心(1488~1552)は『誕如上人日記』に天文10年、17年の上山記事があり、本願寺との交流の深さが知られる。そうした活動を背景としつつ、從来住職の継承・居住の面で不安定であった瑞泉寺において、初めて実質的な經營を推進した人物であった。また法義に熱心であって、真宗教義の上において五箇山衆の指導にあたった人物として大きく評価されなければならないであろう。一方、瑞泉寺にとっての五箇山衆は、与力としての河上衆とは異なり、半僧半俗の毛坊主的性格を持った講衆であったと思われる。そうした講を結ぶことによって五箇山衆は地域的一体性を保ち、また強めていったのである。

### III. 善徳寺をめぐる諸問題

ここまで南砺波の真宗寺院のいま一つの雄、城端善徳寺が登場していない。善徳寺の米歴はどうなのであるか。『富山県史』での金龍静の研究成果に始まり、『善徳寺史』での草野顯之の解明、『城端町の歴史と文化』での大田浩史の叙述などを参照されたい。

さて加賀太田(津幡町)太田にあった受徳寺(周覚末子玄秀系)の「榮玄聞書」第一条に、砂子坂道場の道乗のことが記されている。道乗の俗名は高坂氏で、現南砺市(福光)法林寺の光徳寺の開基であり、同寺本尊裏書に文明3年(1471)蓮如に帰依して下付されたとある(『五尊裏書』)。「開諱記」にみえる石黒分家で元は桑山城にいたが加賀一揆に与同し、文明13年に医王山懸海寺を焼亡させたという坊坂四郎左衛門と同一人物であろう。善徳寺伝では、砂子坂は先に辯如の子周覚の布教地であって、道乗はその道場を周覚の孫蓮真に附属させたのだという。そして善徳寺は蓮如を開基、蓮真は二代と位置づけられることになった。

このように光徳寺伝を踏まえることにより、蓮如より本尊を下付された善徳寺が<sup>3</sup>、新たに蓮如と直接結んだというエポックは重要である。だがおそらく砂子坂門徒はすでに周覚—永存—蓮真に継承されていたのであり、さらに加越国境地域、その交通上の要衝に位置して、辯如の瑞泉寺創建を支える役割を果たしていた人々であった。だが瑞泉寺勝如尼について蓮如は「北陸道当流法再興人」と評し、瑞泉寺は以後由緒を誇ることになり格差を生じた。だが成立段階における血縁上、永存は勝如の兄であって同等であった。ただ勝如が本願寺存如の弟如乗と結婚し、さらに蓮如の二男蓮乗を娘婿にして本願寺との血縁的近さを維持したのに比べ、善徳寺と本願寺との血縁はいささか薄まった。

しかし本願寺と一体化した瑞泉寺一族が加賀二俣本泉寺に移り、瑞泉寺の寺基が不安定化し、さらに本泉寺を継承した蓮悟は若松へ進出し、二俣を離れた。その際に二俣坊を守ったのが周覚末子で永存弟の玄秀であった。北陸に展開した周覚系寺院をスプリングボードとして本願寺系が教団中枢に上昇する一方で、周覚系の永存・玄秀系が一体的に協調し、当時山本にあった周覚嫡系の善徳寺や元来周覚系の核であった二俣本泉寺を支えていたとみえる。さらに永存・玄秀系は巖照寺や受徳寺を営むなど、加越国境域に教線を浸透させた。元米そうした寺院群の中核寺院は蓮真が越前船津の桂島に建立した照護寺であった。だが同寺は永正三年一揆以後、一旦は加賀森本に居を構えたが流浪して実態を失ったため、代わって善徳寺が一門の中核とされ、周覚系一門は同寺に結集したと考えられる。

このように蓮真建立の照護寺の由緒を引き継いだ善徳寺は、実如より、蓮真の遺跡である加賀・越中・能登三か国門徒を善徳寺門徒として認められた。もとより善徳寺が三か国の大本願寺門徒を与力化したのではなく、あくまでも先行開拓者蓮真が教化した門徒衆を承認するにとどまる。それにしても膨大だが、その門徒の所在をほぼ伝えているのが光徳寺蔵文禄3年(1594)6月の「砂子坂末寺之観」である。この砂子坂が善徳寺に当たり、加賀七末寺道場名、越中一四末寺道場名を記し、能登末寺についての一文を記している。

ここでは以上、善徳寺を成立させた係累の紹介に留めておく。(下略)

# 「山科本願寺・井波瑞泉寺・二俣本泉寺・城端善徳寺年表」

久保 尚文2006.6.4作成

[真宗年表・本願寺年表・瑞泉寺系図・御園寺系図・日野系図、  
日野義之「北陸における本派寺一門の動向」(「能登史研究」17、  
『開拓の寺・城・まち』、『善導寺史』、『高山系史』その他の参考)。

延文 5年(1360)	越中水橋門徒、存覚と対面
明徳 元年(1390)	堯雲、瑞泉寺建立の勧進状を書く。紹如の井波瑞泉寺建立
応永10年(1403)	この頃、紹如の三男周覚、越前荒川に興行寺を建てる。
応永14年(1407)	この頃、紹如の次男頼円、越前藤島に超勝寺を建てる。
応永20年(1413)	この年、近江堅田の法住、初めて大谷本願寺参詣
応永22年(1415)	蓮如誕生(父本願寺7代存如)
永享10年(1438)	この年、本願寺坊舎の造営(岡堂形式の成立)
嘉吉 2年(1442)	この頃、存如の弟如乗(～1460)、瑞泉寺に下向(妻勝如＝1428～1495)
宝徳 元年(1449)	この年、如乗、加賀二俣に本泉寺を置く(瑞泉・本泉寺兼住)
長禄 元年(1457)	この年、存如と蓮如、北陸に赴く
寛正 元年(1460)	父存如没。如乗の支持により、蓮如、本願寺相続、蓮如、近江に進出 蓮如、近江堅田の法住に十字名号授与。瑞泉・本泉寺如乗没
寛正 2年(1461)	蓮如の次男蓮乗(1446～1504)、瑞泉・本泉寺下向(妻如秀＝生没年末確認)
寛正 6年(1465)	蓮如、初めて御文(御文章)を書く。門徒の飛躍的拡大開始
応仁 2年(1467)	延暦寺西塔の衆徒、二度にわたり大谷本願寺を破却(→本願寺移転問題)
文明 元年(1469)	蓮如、大津南別所坊舎で居住。蓮如、本泉・瑞泉寺を訪問(賀心物語)。蓮乗に七男 蓮悟(1468～1543)の二俣本泉寺での養育を依頼。 7月28日、蓮如、瑞泉寺(勝如尼)に親鸞絵像を瑞泉寺に下付。
文明 3年(1471)	この頃、蓮如の三男蓮綱(1450～1531)、加賀波佐谷に松岡寺を建てる。
文明 6年(1474)	蓮如、大津南別所を去り、越前吉崎に移る。坊舎建立→群集參集
文明 7年(1475)	吉崎坊焼亡。加賀門徒、富権政親とともに富権幸千代と抗争 加賀門徒、富権政親と抗争。蓮如、東国への途次、瑞泉寺に至る。
文明 9年(1477)	蓮如、越前吉崎を退去一小浜・丹波・摂津→河内出口に至る。
文明10年(1478)	この間に勝如尼の甥蓮真、蓮如を開基として、砂子坂に善徳寺創建
文明11年(1479)	加賀一揆衆、瑞泉寺(越中・加賀の重鎮勝如尼)を頼る 蓮乗、瑞泉寺一本泉寺の間に土山坊(後の勝興寺)を置く。
文明12年(1480)	蓮如、山科本願寺御影堂造営。親鸞絵像安置。10月、日野富子が参詣
文明13年(1481)	瑞泉寺一向衆、山田川田屋河原合戦で、医王山慈海寺衆・石黒氏を破る。
文明15年(1483)	蓮如の長男順如没
文明18年(1486)	これ以前、蓮誓、加賀山田衆の招きで光教寺に移る。兼住土山坊を次男実玄(1486～1543)名義とする。蓮誓・実玄の勝如尼からの自立化開始。

長享 元年(1487)	蓮悟、若松本泉寺を建てる。勝如尼からの自立。
長享 2年(1488)	越中守護畠山政長、蓮如に加賀・越中門徒の所領押妨停止指令を要求 6月 加賀門徒、富樺政親を高尾城に滅ぼす。7月 蓮如、將軍足利義尚・管領細川政元の指示により、加賀門徒の乱暴を禁ずる(お叱りの御文)
延徳 元年(1489)	蓮如、山科本願寺寺務(留守職)を実如(1458~1525)に譲り、隠居。蓮如、蓮能(能登畠山方出身)と再婚。所生は大坂坊実賢以下の五男二女。
延徳 2年(1490)	山科本願寺実如・在加賀同母系三兄弟の教団・門末支配体制の開始。
明応 元年(1491)	蓮如9弟大坂坊実賢の誕生。能登(山科方)本願寺門徒、越中守護畠山へ与同の能登守護畠山義統と抗争。赤尾道宗、山科本願寺蓮如に参詣開始
明応 2年(1493)	蓮如10男本泉寺・順徳寺実悟の誕生→本泉寺蓮悟養子。 細川政元、義澄を新将軍に擁立。越中守護畠山政長を河内正覚寺陣に討つ。越中守護代神保長誠、幽閉の前将軍足利義材を放生津に脱出させる。
明応 3年(1494)	この明応二年政変により、室町幕府分裂抗争の地方波及。 上山坊、高木場坊に移る。
明応 4年(1495)	勝如尼没→蓮誓・実玄(高木場坊)父子の自立完了
明応 6年(1497)	蓮如、大坂坊完成(→蓮能尼・実賢らの住坊化進展)。足利義材(越中公方)の帰洛軍編成進展
明応 7年(1498)	足利義材、義尹と改名。越前一乗谷朝倉氏を頼り、動座
明応 8年(1499)	蓮如、大坂坊より山科本願寺に帰住。蓮如、実如・蓮綱・蓮誓・蓮淳・蓮悟に後事を託す。下間蓮崇を許す。3/25、蓮如、死去
	越中守護畠山尚慶、義尹に応じ摂津侵攻。連動した十一揆勢、京を包囲。
	細川政元方の赤沢宗益、近江坂本で義尹軍を擊破。また政元方は尚慶を摂津天王寺に破る。義尹、大内氏を頼って周防に逃亡
明応 9年(1500)	畠山尚慶、和泉守護細川元有を岸和田に攻略し、河内善田城の畠山義英を攻撃したが、薬師寺元一・赤沢宗益軍に敗れる。
文亀 元年(1501)	神保長誠没。慶宗神保家を相続。赤尾道宗、二一か条の覚書を書く。
永正 元年(1504)	摂津守護代薬師寺元一、赤沢らと結び、細川政元に離反し、養子細川澄元を擁立。両畠山和し、薬師寺に与同。元一自害。赤沢、政元方へ復帰。
永正 2年(1505)	山城守護代吉西元長、細川政元に離反し、山科を乱す。赤沢軍、畠山義英を討つ。足利義尹、大内義興に擁されて再上洛との風説流布。
永正 3年(1506)	突如と加賀三兄弟、加賀門徒に護法一揆蜂起を要請、①大阪坊実賢、②越中守護畠山尚慶方(神保以下)、③越前朝倉・真宗三門徒派討伐に動員。神保以下の越中国衆、国外退去。超勝寺や吉崎留守職本覚寺、越前退去。越中の一揆勢支配下の京都権門(寺社本所)領莊園の再興許可。越後守護代長尾景景の下剋上非難。一揆追討を標榜して越中進攻。神保・椎名・土肥の旧地復帰達成。景景の砺波芦谷野戰死後、越後勢帰国。一方、越中守護畠山尚慶(守護代遊佐)方との対峙を継続し、砺波郡守護代遊佐の復帰達成を阻止。神保との協調を図りつつ、砺波郡支配を水絶化。
永正 4年(1507)	細川政元、養子細川澄之(九条政基の子)方の香西・薬師寺に暗殺される。家中内訌。澄之、三人目の養子細川高国に討たれる。実如、窮地。山科より堅田に避難。越中の一揆支配劣化。両畠山氏再分裂・抗争。
永正 5年(1508)	足利義尹(植)、大内義興に擁され、細川高国に迎えられて帰洛。將軍職に復帰。河内の畠山尚慶、赤沢を殺害。義植政権に参加。

永正 6年(1509)	突如、堅田から山科本願寺へ帰住。突如、瑞泉寺賢心へ四幅絵伝下付。
永正 9年(1512)	細川高国・越中太田保に細川家領大田莊を再興。一向衆進出の基盤形成
永正13年(1516)	本願寺円如妻慶寿院鎮永(高木場坊実玄妻妙勝の妹)より、証如誕生。 赤尾道宗没。
永正14年(1517)	突如、高木場坊に勝興寺号を付与。実玄自立。本願寺一門格化に道開く
永正15年(1518)	突如、本願寺一門の北国衆に三箇条掟を出す。在地紛争防止令 越中守護畠山尚慶(卜山)、義英の子勝王を猶子化。越中守護職の代行化。勝王、越後長尾為景に越中一郡守護代職付与を条件に神保慶宗討伐軍派遣を要請。蓮能尼没。蓮悟、和田本覚寺蓮惠を破門→加賀教団の亀裂。
永正16年(1519)	突如、一門一家の制を定める。本願寺内永久典範化する家中掟 長尾為景、越中入国。神保勢、二上山に籠る。為景帰国。勝興寺焼亡。
永正17年(1520)	卜山、為景に越中再征を要請。為景、神保・椎名・十肥を滅ぼす。卜山、子息種長に追放される→和泉堺を経て淡路島へ。大永二年死去
大永 元年(1521)	長尾為景、本泉寺蓮悟指導下の加賀一向一揆方を攻撃。蓮悟、北陸門末に一揆蜂起を指令。本願寺円如(突如の後継者)、光教寺蓮誓死去。
大永 3年(1523)	本願寺突如と加賀教團蓮綱・蓮悟兄弟、長尾為景(公儀)と和睦。→ 永禄8年(1565)、本願寺顕如の対上杉謙信開戦まで。以後、越中の現状守護支配再認。為景の新川郡守護代職認定。遊佐の駒波郡復帰は実質的に否認。 ただし在河内・紀伊の畠山守護職と遊佐の守護代職の名目は継続。一方、加賀教団の蓮悟=若松本泉寺指導体制も公認。→以後の相互交流展開
大永 5年(1525)	本願寺突如、死去。孫証如本願寺留守職を継職
享禄 4年(1531)	本願寺家中騒動大小一揆発生。超勝寺・本覚寺方勝利、加賀三か寺(若松本泉寺・山田光教寺顕誓・波佐谷松岡寺蓮慶、清沢願徳寺実悟)焼討。松岡寺蓮綱没
天文 7年(1538)	下間頼秀、生害を命じられる。
天文12年(1543)	本泉寺蓮悟没
天文15年(1546)	加賀金沢(若松)坊舎へ木仏・親鸞影像・親鸞絵伝等下付→「金沢御坊」
天文19年(1550)	加賀三か寺が赦免される
永禄 2年(1559)	城端城主荒木善太夫の招請で、善徳寺、福光より城端に移転

# 戦国末の五箇山と織田・佐々氏

高岡 鶴

## 1はじめに

砺波地方南部(南砺)の平野部と五箇山の間には、北から八乙女山・大寺山・扇山・赤祖父山・高清水山などが標高1,000m級の山並みを連ねてそびえている。この高清水(たかしうす)山地の山中で、平成元年から5年にかけて中世の山城跡とみられる遺構が次々に確認された。これらの遺構はこれまで文献史料にもほとんど記載がなく、一般には知られていなかった。中世史料が少ないなかでこれらの遺構は南砺、特に五箇山の戦国史を明らかにするうえで大きな意味を持つと考えられる。ここでは、これらの城砦遺構と数少ない中世史料の検討を通して戦国末の五箇山の実態を明らかにしたい。

## 2高清水山地の城砦群

### (1) 八乙女山砦

山地の北端にある八乙女山(751.8m)の山頂に築かれている。山頂一帯には広い平坦面が存在するが、そのほとんどは自然地形であり、その自然の地形を活かす形で最小限度の施設を設け、皆として利用したものである。中心となるのは山頂部の北端にある高台で、ここを主郭兼物見台としている。南端には比較的広い平坦面が見られ、有事の際には多数の人員を収容できたと思われる。また、山頂の西側下には水をたたえる天池があり、水源として利用できたとみられる。この広い山頂部を守る施設として、北東に1本、南に2本、計3本の堀切が尾根筋を遮断する目的で設けられている。さらに山頂部の南側には急峻な切岸と帶郭を設けることから、八乙女山から南方に伸びる尾根筋を特に警戒していたことがわかる。

### (2) 小屋場平城

赤祖父山の西側中腹にある通称「コヤバダイラ」を中心とした一帯に築かれている。城は標高650~675mの峻険な尾根上に設けられた遺構群(A地区)とその下の標高520~580mの斜面に設けられた遺構群(B地区)の2地区から成る。この内、主体部となるのは多数の平坦面を有するB地区であり、中心的な居住施設が置かれていたとみられる。背後は堅堀を伴う急峻な斜面と尾根上のA地区によって守られ、東側は谷に臨んで何段もの切岸を階段状に連ねる。また西側は深い谷に面して高い尾根が防壁状に伸び、畝状空堀群と低い土塁により主郭(最大の平坦面、43×13m)の西側が囲まれる。平野部に面した地区的北側は急な斜面で守られるが、特に上界などの防御施設はない。一方、A地区は尾根の北端部に設けられた2段の平坦面と、その背後を守るために設けられた大小4本の堀切から成る。なお、両地区の間の斜面上には上幅3~4m、深さ1m程度の堅堀が多数認められる。ただし、この内の一部は後世、麓へ下る道として利用されたものである。

ところで、小屋場平の遺構は最終的にA地区の空堀群などの存在から城郭とみなせるが、①主体部のあるB地区の平野側に土塁・空堀などの防御施設が設けられていないこと、②郭となる平坦面に小規模なものが多く、配置形態にも城郭的なまとまりがないことから、一つの推測として、当初(西井龍儀氏の御教示によれば9~10世紀頃か)山林修行(修驗)などの拠点として寺院が存在し、その後衰退後の戦国末に寺跡を中心に防御施設を設けて城郭化したとも考えられる。B地区に特徴的に残る、山腹を削って設けた平坦面の在り方が医王山の山腹一帯に残された平坦面(寺跡)とよく似ていることも、その推測を裏付けようである。また現在、高清水山地の山麓部に残る志観寺・連代寺・清玄寺・東城寺といった地名や、同山地の一峰である大寺山の山名など、「寺」の付く地名が周辺に多く分布することも、平安期な

どの淨土真宗漫透以前に存在した寺院の痕跡を示すように思われる。とすれば、山岳寺院跡を城郭化した事例としても貴重である。

### (3) 新山砦

小屋場平城と谷をはさんだ西側の尾根上(標高604.8m)に築かれている。主郭となる細長い平坦面(10×65m)とその南北に設けられた堀切から成る。砦跡の東西は急峻な深い谷で、麓からの登り道もかなりきつい急な尾根道である。

### (4) 田中平城

新山砦と深い谷をはさんだ西側の山上(標高635.2m)に築かれている。「城端町史」によると、付近に残る「隠れ谷」や「小屋の平」地名はかつて上杉謙信が砺波平野に攻め入った際、一帯の住民が避難した遺跡に由来するという。主郭は20×42mの平坦面で、南側を低い土塁や空堀で守り、西側にはいくつもの平坦面が階段状に設けられている。また、主郭の北方はやせ尾根が伸び、先端部に出丸に相当する平坦面が作られている。

### (5) 鉢伏山砦

田中平城の西側に谷をはさんで立地する。平野側に張り出した尾根の先端部(標高607.5m)に築かれ、主郭は58×11mの細長い平坦面である。東側を除く三方が深い谷で囲まれた要害で、尾根続きとなる東側を上幅12m、深さ4mの堀切で遮断している。

## 3 城砦群の立地と性格

これら城砦群の立地上の特徴を見ていくと、まず共通して高い標高があげられる。最高地点で見ると、八乙女山の752mを筆頭に小屋場平、田中平、鉢伏山、新山が600m台で続いている。富山県内で最も高い中世山城の標高は鉢ヶ岳砦(糸魚川市)の861m、第2位が千石山城(上市町)の757m、そして第3位が八乙女山砦である。次に立地の場所を見ていくと、北端の八乙女山砦だけが山頂部に立地し、他の4か所は高清水山地の稜線から平野側に張り出した尾根筋に立地する。いずれも南砺の平野部を見下ろすように築かれていることから、背後に五箇山地域が控えていることを考慮すれば、その五箇山の勢力が平野部に向けて築いた可能性が高い。特に南部の4か所については、ほぼ同じ高さで谷をはさんで横一線になることから、互いに連携が図られていたことが明らかであり、同一の勢力によって築かれたことが推測できる。次に交通路との関係が注目される。いずれの城砦も古くから南砺の平野部と五箇山を結ぶ山越えの道が付近を通ることから、それらの道と密接な関係にあったことが知られる。以上の点から、これらの城砦群は五箇山側の勢力が南砺の平野側から五箇山に入るルートを押さえ、防衛を図るために築いたものとみることができる。

## 4 城砦群を築いた勢力

戦国期の五箇山には蓮如に深く帰依した赤尾道宗(永正13年=1516没)以来、淨土真宗の信仰が広まり、門徒組織が形成されていた。越中の一向一揆(真宗勢力)は初め上杉氏に敵対したが、天正4年(1576)本願寺と上杉の和睦により、その後は上杉と手を結んで織田方に対抗した。しかし、越中国内の国人らは謙信死去により多くが織田方に付き、一揆の代表的勢力である瑞泉寺・勝興寺に敵対行動を取るようになった。こうして天正9年(1581)、両寺はいずれも織田方の攻撃により陥落した。

一方、中央では天正8年閏3月、本願寺の頭如が織田信長と和睦し、4月には石山本願寺を退去し、11年にわたる石山合戦に終止符が打たれた。しかし、頭如の長男教如はなおも石山籠城を主張し、各地の門徒に蜂起を促した。当時、五箇山地域の真宗勢力もその教如に応ずる形で織田方への抗戦を継続したとみられる。また、八乙女山には興味深い伝説も残されている。すなわち、瑞泉寺の住職顕秀が佐々成政と戦った際、この山上に陣を張ったことにちなみ、院家小場・豊前小場・賄小場などの地名が残るという(宇野次四郎著「井波謡」)。こうした伝説は、瑞泉寺の陥落後、寺を落ち延びた住職が八乙女山などの山

中に籠って佐々方と戦ったことを示すものであり、高清水山地一帯に築かれた城砦が瑞泉寺や同寺を支援する五箇山の一揆勢力などによって築かれたことを推測させる。次の史料はそのことを裏付けるものである。

〔A〕瑞泉寺佐運(顯秀)書状(『富山県史』史料編III 17号)

急度令啓候、仍佐々内藏助其外神保方不残打立間川上相踏候、号窪与地へ被掛、從去三日至今日堀縁在陣二候、雖然人數・鉄炮・玉薬以下兼而蓄置候之間、雖及數日候、城中不可有越度候間可御心易候、然者此節幸之儀候条討果旨念願候、依之山中所々井櫛尾甚助・寺嶋牛介示合、今日八日先山口迄出置候、然者越府御馬御相連之儀如何候哉、無曲次第候、菟角貴所為御手前火前ヲ被相立、深々与御勵之儀専要候、於御延引者当手卒可失勇氣候、火急ニ御手遣可為肝心候、隨而越之御様子矣儀承度候、恐々謹言

九月八日

〔瑞泉寺〕  
佐運

黒金兵部少輔殿

御宿所

これは天正9年(1581)9月8日、瑞泉寺の住職佐運(顯秀)が越中国内に在番する上杉部将黒木景信宛てた書状であり、織田方の佐々成政と神保長住らが河上(小矢部川上流域)に侵攻して一揆方の「塙」城(井口城を指す)を攻め、去る3日から8日まで堀際に陣取っていると伝えている。しかし、一揆方は兵員・鉄砲・弾薬以下をかねてから備蓄していたため、数日間に及ぶ攻撃にも耐えているとある。とはいえる、上杉方からの援軍出兵が遅れた場合には、城兵の志気も衰えると不安を訴えている。顯秀はおそらくこれより先、瑞泉寺の陥落により背後の五箇山に逃れ、八乙女山などを拠点として織田方に抵抗していたとみられる。

注目されるのは、侵攻した織田方を討ち滅ぼすため、高清水山中に陣取る一揆方と櫛尾(小島)甚助・寺嶋牛介が示し合わせ、8日に井口城に近い「山口」まで兵を出したと述べている点にある(傍縁部)。小島・寺嶋は上杉方に属した国人で、この年の5月、佐々成政に拠点の滝山城(富山市)を攻められ、城に火を放って落ち延びていった。この書状によれば、両人はその後山越えに五箇山へ入っていたことが明らかとなる。当時の五箇山には、本願寺の教如を支持する真宗門徒勢力が信仰に裏付けられた強い団結のもと、上杉氏と結んで織田方への抵抗活動を繰り広げていた。五箇山は周囲を高く陥しい山並みで守られた地域であり、長らく外部からの侵入を寄せつけない独自の空間を保っていた。織田方に追われた上杉方国人らが逃げ込むには恰好の場と言えた。

では、小島・寺嶋らが井口城を支援するため兵を繰り出した「山口」とは、どこを指すのであろうか。おそらく、それは井口と五箇山を結ぶルートから考えて、五箇山側から兵を出しやすい新山越え・杉尾越えの道沿いにある小屋場平・新山・田中平・鉢伏山などの城砦を指すとみられる。これらの城砦は新山・杉尾などの峰と麓の平野との中間地点に位置し、背後の五箇山側からの支援を受けやすく、また井口方面への出撃にも適している。逆に織田方が攻め寄せるには急峻な山道の登りに時間を要するため、守る側が事前に十分な防衛態勢を取って迎え撃つことが可能である。このように考えれば、高清水山地にあって、北端の八乙女山を別にすると、小屋場平などの4か所が井口と五箇山を結ぶ道沿いに集中して存在することの意味がよく理解できると思われる。

## 5 織田・佐々勢の侵入を阻んだもの

ところで、五箇山に入って真宗勢力と共に織田・佐々方と戦った国人は他にもいる。『信長公記』によると、同じ天正9年の7月、砺波郡の有力国人だった木舟城主石黒左近は近江で信長に滅ぼされたが、弟の湯原国信は木舟城を退去し、その後五箇山にたて籠もって抗戦を続けたという(『湯原家記』)。また翌

10年3月には、上杉方に復属した国人小嶋職鎮・唐人親広が織田方の富山城を一時奪ったものの、柴田・佐久間・佐々・前田ら織田軍の反撃により、やがて城を脱出して五箇山に逃れている。このように上杉方国人達が五箇山を転進先に選んだのは、単に周囲が険しい山並みに閉まれた要害な地形だったからではない。そこには天文年間以来の「五ヶ山惣中」を中心にした強固な宗教的團結があり、さらにその組織が信長に敵対する本願寺教如や上杉景勝との連携下にあったことがあげられる。そのことを裏付けるものとして、次の史料がある。

〔B〕上杉景勝書状（『富山県史』史料編III19号）

去比書中差越委及返答候キ、乍幾度毎度之防戦得勝利、如何ニも仕置堅固之由無比  
類候、如啓先書、当下旬御出馬令必然奥郡人數召寄候、然者甲州當方連々示合有子  
細、今般長延寺為使被差越候、依之万端行計策以下調談故于今進発延引候、兎角味  
方中見放聞敷之由深掉心底之旨、其心得肝心候、長延寺近日可為帰國之間則可令出  
馬候、其間之儀弥堅固之仕置専用候、猶自各可申越候、謹言

十月三日

景勝（押印）

五ヶ山惣中

これは天正9年10月、上杉景勝が五箇山惣中宛てに目下、武田勝頼との打ち合わせのため、越中への出兵が遅れていることをわびたものであるが、冒頭で五箇山勢がいつも防戦に勝利を収めていることをほめたたえている（傍線部）。おそらく一か月前の井口城をめぐる戦いなどで国人達と「惣中」が協力して織田勢の五箇山侵攻を許さなかったことを指しているのであろう。この時期、東部の新川郡で上杉方が次第に不利な状況になるなか、西部の五箇山地域が上杉方と結んで織田方への抗戦を続けたことは、景勝にとって大きな意味を持ったはずである。

なお、五箇山地域が織田・佐々勢の侵入を許さなかった理由としては、前述の国人勢力の合流以外に、当時の主要な武器だった鉄砲の火薬となる煙硝の生産地だったことが大きいとみられる。五箇山の煙硝は石山合戦時に大坂の本願寺まで送られたと伝えられており、こうした火薬の生産地を握っていたことが国人や一揆勢力の抗戦をより強固なものにしたと考えられる。

## 6 おわりに

高清水山地の城砦遺構をもとに過去いくつかの報告を行ってきた。それらは從来具体的に語られることのなかった五箇山の戦国末の実相に迫ろうとする私のささやかな試みであった。最初の報告以来、13年もの歳月が経過したが、今回の発表にあたり、A史料の解釈を再検討し、瑞泉寺が織田勢に攻められたものとしてきた従来の見解を井口城の攻防を示すものに改めた。その結果、支援の国人勢が陣取った「山口」についても、従来は八乙女山としてきた見解から井口に近い小屋場平などの城砦群に改めている。ただし、五箇山が果たしてきた役割や性格など、当時の五箇山の様相自体については、今のところ、これまでの見解を変更する必要はないと考えている。

〔参考〕 高清水山地の城砦群に関するこれまでの調査研究報告

高岡 徹『瑞泉寺と井波城をめぐる戦国史－「なみ歴史の森」構想－』とやま歴史的環境づくり研究会、1993年

同 『井口城をめぐって』『井口村史 上巻』井口村、1995年

同 『越中五箇山をめぐる城砦群と戦国史の様相』『中世の風景を読む 第4巻』新人物往来社、1995年

# 戦国のまちづくり－寺内町がむすぶ近畿と北陸－

仁木 宏

## はじめに

はじめに、宗教と都市(まち)の関係について考えてみよう。

私たちは、「仮は来世だけ面倒をみてくればよい。宗教が政治や経済に口を出すのはよくないことだ」と思いがちである。たしかに、近代社会においてはそういう風にいうこともできるかもしれない。しかし、日本の中世社会(鎌倉時代・南北朝時代・室町時代・戦国時代)においては、政治・経済・宗教が相互に密接にかかわりをもつのがあたりまえであった。それは、浄土真宗にかぎったことではなく、天台宗・真言宗や時宗・法華宗などにおいても同じであった。

寺院や神社と都市の結びつきといえば、現代人であるわれわれは門前町のことを連想する。寺社への参詣者を対象にしたお土産屋がならぶ町並みのイメージである。しかし、中世では、そうした「門前」だけでなく、寺社の「境内」「寺内」にも、僧侶・神官以外の多くの人が住んでおり、なかにはそこで商売する人もいた。その他、武士もいれば、職人もいる。金貸しもいれば、芸能・文化にたずさわる人たちも住んでいるということが、中世ではそれほどめずらしいことではなかった。

こうした性格をもつ寺社は、たとえ都市そのものではないにしても、「都市的な場」であるということはできるだろう。

中世の都市の代表格は港町である。武家はまだ商人や職人を集める力をもっていなかったため、城下町はほとんど成立していない。あとは宿(宿場町)が点在する程度である。こうした都市の一般的な状況からすれば、多くの人が集まって住む、寺社の境内・門前が地域社会の中心地として大きな地位を占めていたことは容易に推量できるだろう。

このような寺院の中に、戦国時代に急速に発展し、近畿地方を中心に広い範囲にわたって「都市的な場」を形成したのが、真宗(一乗宗)の寺内町である。寺内町は、近畿地方のほか、滋賀県、東海地方(岐阜県、愛知県、三重県)、瀬戸内地方(広島県)などにも分布する。そして北陸地方(石川県、富山県)にも数多くの寺内町があったことが知られている。

そこで今日は、寺内町が一番多い近畿地方についての最新の研究を紹介し、この北陸地方の寺内町を考えてゆくための手がかりをお伝えすることとしたい。

## 山岳宗教都市から境内都市へ

寺内町の多くは、本願寺第8世蓮如とのかかわりで説明され、真宗独自のまちづくりがなされたことが強調されることが多い。しかし、地域社会のなかでみた場合、寺内町は周辺の別の町や村の影響をうけている場合が案外多いことに気づく。とりわけ、北陸地方は、蓮如が近畿地方を一時離れて、本願寺教団を再興させていった重要地域であり、越前吉崎の発展が教団の隆盛を物語ったのである。だとすれば、吉崎の町のあり方が、先行する北陸地方の寺院(都市)とどのような関係にあるのか、調べることは重要だといえよう。

中世の古い時代、修験者が籠もることからはじまって、かなり高い山に堂舎が建ちならぶ状況がみられる。越中においては、医王山が有名である(図1・2)。峰々だけでなく、山麓にも人々が多く暮らしていたらしい。能登石動山(石川県中能登町)もかなり高い山に位置するが、ある程度平坦な面を切り開いて堂舎をならべていたようである。その参詣曼荼羅では、中心部に近いところに町屋が軒をつらねている様子が描かれている(図3)。

これがさらに発展したものとして、越前白山平泉寺(福井県勝山市)がある(図4)。緩い傾斜の斜面上

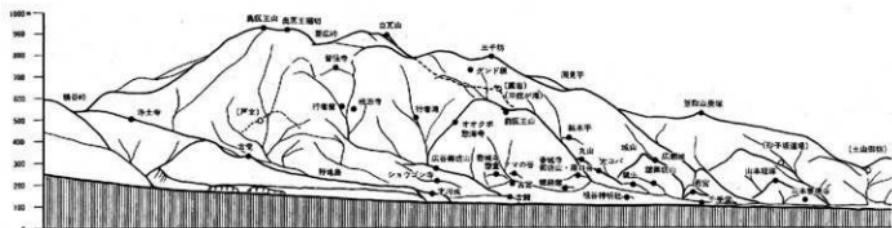


図1 小矢部川からみた医王山の遠眺 ○( )は医王山西側の遺跡 「医王は語る」(富山県福光町・医王山文化調査委員会 1993)

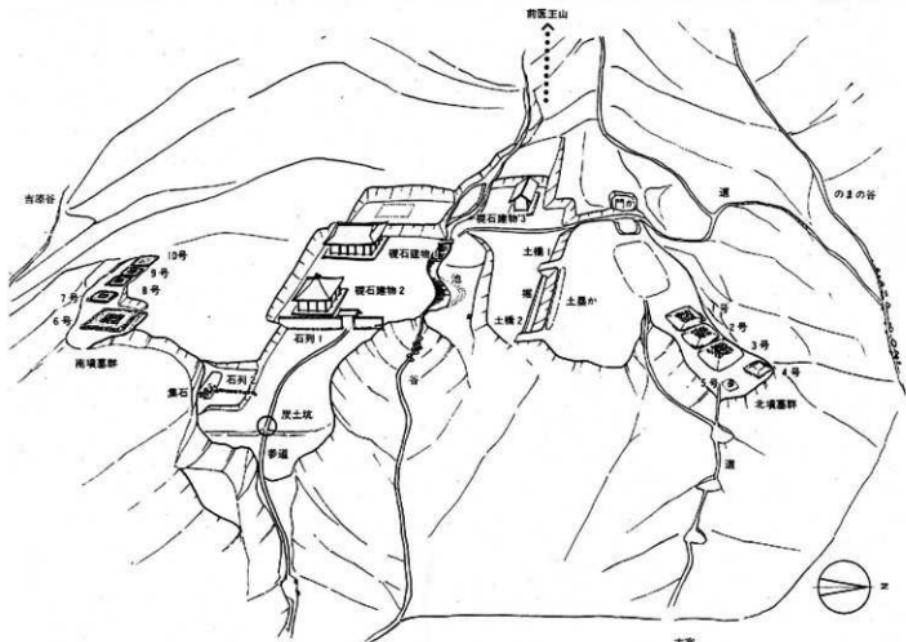


図2. 産業廃物燃焼施設(宝塚市元町(西井製鐵所作成)、「医王は燃る!」(高山島謙光町・医王山文化講演委員会、1993))

に石敷きの整備された道路が縦横にひかれ、多数の坊院が整然と建ちならぶ様子が発掘調査によって明らかになってきた。これほど広大な境内はまれであるが、近江伊吹山弥高寺(滋賀県米原市)(図6)のように、中心の道路の両側に階段状に削平地がつくのようなパターンはしばしばみられる。

これらの寺院では、市場は周縁部に設けられる場合が多いが、それらもふくめて一体として宗教都市、境内都市とよぶことができるだろう。

吉崎と山科

文明3(1471)年、近畿地方から北陸へ移ってきた蓮如が居を定めたのが越前吉崎(福井県あわら市)であった(図5)。御坊の建つ中心部からのびる道路の両側に多屋(たや)とよばれる、僧侶や門徒の居住施設が展開していた。この構造は、弥高寺によく似ている。同じ越前の平泉寺などにも近いといえるだろう。



図3 石動山古絵図(石動山区有)  
「史跡能登石動山」(石川県鹿島町教育委員会 1979)



図5 古崎御坊概要図  
『中世大仏の都市機能と構造に関する調査研究』(大阪市立博物館 1999)



図4 越前白山平泉寺(福井県勝山市)「よみがえる平泉寺」(勝山市 1994)

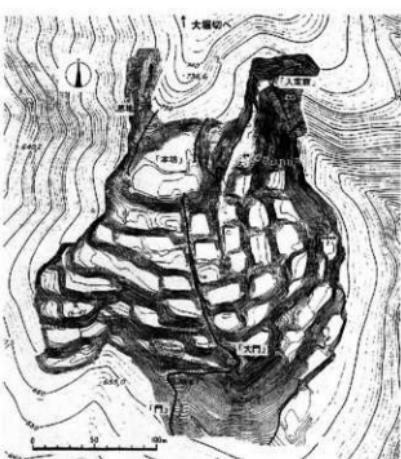


図6 弥高寺跡測量図

また吉崎では、商業空間は山の下に別個にあったと考えられている(図7)。吉崎は原初的な寺内町のあり方を示すといわれるが、そのモデルは、宗派としては真宗ときびしく対立した旧仏教勢力の境内都市だったのである。

しかし、再び近畿地方にもどった蓮如が築いた山科御坊の構造は、吉崎とは大きく異なる(図8)。蓮如時代の山科は、第Ⅰ郭(いわゆる「御本寺」)部分だけだったのではないかと想定されている。西側は比高差数メートルの崖に面しており、これは吉崎に似ているといえなくもないが、御坊とその周辺はフラットな平面にのっている。このあたりの建物群の並び方については、発掘調査が進んでいないことからほとんどのわからない。地籍図によるかぎり、吉崎(=北陸の境内都市)のようなパターンではないようである。むしろ、京都の郊外に立地する禅宗寺院に近いようにも思われる。

その後、16世紀になって、第Ⅱ郭(「内寺内」)、第Ⅲ郭(「外寺内」)などが整備されたらしい。



図7 越前吉崎(福井県あわら市)

『中世大阪の都市機能と構造に関する調査研究』(大阪市立博物館 1999)



図8 山科寺内町周辺地図(アミ部分は土壁跡)

福島克彦「戦国期寺内町の空間構造(『寺内町研究』10 2005)」

この時点で、周囲に巨大な土塁と堀が築かれたのであろう。その規模は、豊臣秀吉が1580年代になって京都のまわり築いた「御土居」並みの巨大さであった。また複雑な「折れ」構造は同時代の武家の城郭にくらべて数十年進歩しているといわれる。本願寺がもつ卓越した城郭技術が発揮されたのである。ただ、山科の場合、商業空間が寺内町内部にあったのかどうか不明である。

大坂(石山)

山科の次に本願寺が本拠を置いたのは、摂津大坂である。

大坂は、蓮如の没後、寺内町として発展し、織田信長との戦争に突入する直前の永禄年間(1560年代)が最盛期であったと思われる。この頃の大坂の繁栄の様子は、次の文章から知ることができる。

抑も大坂は凡そ日本一の境地なり。其子細は、奈良・堺・京都に程近く、殊更、淀・鳥羽より大坂城戸口まで舟の通ひ直にして、四方に節所を拘へ、北は賀茂川・白川・桂川・淀・宇治川の大河の流れ幾重共なく、二里・三里の内、中津川・吹田川・江口川・神崎川引廻はし、東南は尼上が萬・立田山・生駒山・飯盛山の遠山の景氣を見送り、麓は道明寺川・大和川の流に新ひらきの淵、立田の谷水流れ合ひ、大坂の腰まで三里・四里の間、江と川とつゞひて渺々と引きまはし、西は滄海漫々として、日本の地は申すに及ばず、唐土・高麗・南蛮の舟海上に出入り、五畿七道集りて売買利潤富貴の渢なり。隣国の大門家馳集り、加賀國より城作を召寄せ、方八町に相構へ、真中に高き地形あり、爰に一派水上の御堂をこうこうと建立し、前には池水を湛、一蓮托生の蓮を生じ、後には弘誓の舟をうかべ、仏前に光明ヲ輝、利劍即是ノ名号ハ煩惱賊ノ怨敵ヲ治シ、仏法繁昌の靈地に在家を立て、覺を並べ、軒を継ぎ、福祐の煙厚く、偏此法を尊み、遠国波瀬より日夜朝暮仏詣の輩道に絶えず。

(「信長公記」卷十三)

現在の大坂平野の中心に位置する大阪本願寺・寺内町が、西に面する瀬戸内海をつうじての国際貿易の活発化にも乗って、大変な繁栄を誇っていた様子がいきいきと描かれている。

大坂寺内町の跡地には豊臣秀吉、ついで徳川家康が大坂城を築いたため、寺内町当時の地形については現在、ほとんどわからない。だが、大坂は上町台地とよばれる丘陵の先端に位置することから、かなりアップダウンのはげしい地形に都市域が広がっていたものと推定される。

大坂の特徴は、「六町」とよばれる六つの町を付属させていたことに求められる。寺内の領域にかなりの規模の町を複数包摂したことから、ある意味、大坂で初めて寺内「町」が成立したといえるかもしれない。堂舎や僧侶の居住空間より町場の空間の方が大きくなり、その意味で都市らしくなったといえるかもしれない。寺内町の住民の中には、商う商品に由来すると思われる屋号をもつ者も多く、寺内町内部に商業空間(常設店舗)があったことはまちがいない。

なお、大坂本願寺、大坂寺内町は、一般には「石山本願寺」「石山寺内町」とよばれるが、この地の寺や町を「石山」とよぶようになったのはのちの豊臣時代からである。ゆえに、正確には大坂本願寺、大坂寺内町とよぶべきなのである。

## 大阪平野の寺内町の特徴

16世紀になると、近畿地方、とりわけ大阪平野に多数の寺内町が出現する。摂津塚口、小浜、富田、河内枚方、招提、久宝寺、萱振、富田林、和泉貝塚などで、大阪を扇の要として衛星都市のように展開していることがわかる(図9)。



図9 戦国時代大阪平野想定復元図(仁木)

これらの寺内町は、周辺農村の人々の結集の核となっていた。それは信仰面だけでなく、政治、経済、文化などの面においてもある。経済面においては、真宗門徒であるなしにかかわらず、村の近くに町があることは便利であり、その振興が期待された。「閉じられた」農村でのみ生活を送るのではなく、近くに町ができるによって、遠い国の文化にもふれる機会を得て、地域の人々の暮らしは豊かになってゆくのである。

そこで寺内町は都市特権を権力から獲得しようとする。次に示すのは、南河内の富田林寺内町が獲得した特権である。

定む 富田林道場

- 一、諸公事免許の事
  - 一、徳政行うべからざる事
  - 一、諸商人座公事（免許）の事
  - 一、国質・所質ならびに付沙汰の事
  - 一、寺中の儀、いずれも大阪並たるべき事

右の条々、堅く定め置かれおわんぬ。もし、この旨に背き、違犯の輩においては、たちまち嚴科に処せらるべきものなり。よって下知くだんのことし。

(1560) 永祿三年三月日 (安見宗房) 美作守在判

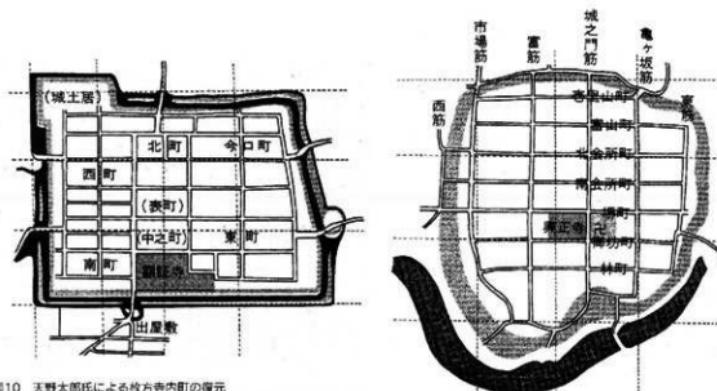


図10 天野太郎氏による枚方寺内町の復元  
福島克彦「戦国期寺内町の空間構造」(『寺内町研究』10 2005)

これは、南河内を支配する畠山氏(越中の畠山氏の同族)権力からもらったものである。注目されるのは、これらの特権を「大坂並」み、つまり大坂寺内町を基準に得ていることである。こうして大阪平野の寺内町は、大坂を中心に相互の関係を強めたのである。

では、これらの寺内町はどのような形を示していたのだろうか。從来は、富田林、久宝寺や大和今井などが典型的な寺内町とされていた(図10)。碁盤目状の整った道路が設定され、まわりを土塁と堀で囲む町の姿である。しかし、最近のいくつかの調査によって、こうした道路の形状が近世(17世紀?)に形づくられたものであり、戦国時代はもっと複雑な(不統一な)道路、町並みだったことが推定されるよう

になった。但し、土塁と堀は整えられていたことが確認されている。

こうした平野部にできた寺内町を第1類型とよぶなら、最近、戦国時代の実態を残す寺内町の遺構として注目されている第2類型の寺内町は、丘陵上に位置するのが特徴である。たとえば、河内枚方(図11・12)は独立した丘上に御坊が立地し、別の尾根上に「上町」が位置する。これに対して「歳谷」の町は谷間にあるが、これは、寺内町に隣接する三矢・岡と隣接した場所に町並みを確保するためと考えられている。



図11 枚方寺内町地籍図(明治20年、土地台帳……)  
福島克彦「戦国期寺内町の空間構造(寺内町研究)10 2005」



図12 枚方寺内町地籍図  
(明治20年(1887年)旧公園、土地台帳(大阪法務局枚方出張所所蔵)、および  
現行地図をもとに制作)ゴシック文字は小字

枚方のすぐ西側は淀川で、三矢や岡は、そこに寺内町ができる以前からの川湊(港町)であった。この三矢・岡もふくめて、枚方、「寺内」と認識されることもあった。

摂津富田も複雑な構造をもつ寺内町である(図13・14)。光照寺・教行寺という二つの真宗寺院が立地し、その間に古市場・東町などからなる一本街村の町場がつづく。これ以外に、幕府ともゆかりの深い禅宗寺院である普門寺も「寺内」にある。北東は富田宿とよばれる部分で「寺外」とも表現される。ここにも町並みが広がっていた。この富田は丘陵の先端部に位置し、「寺内」と「寺外」は別々の丘陵上にあるのである。



図13 富田周辺地形図  
福島克彦「戦国後期摂津富田集落と『寺内』」(『寺内町研究』5 2000)

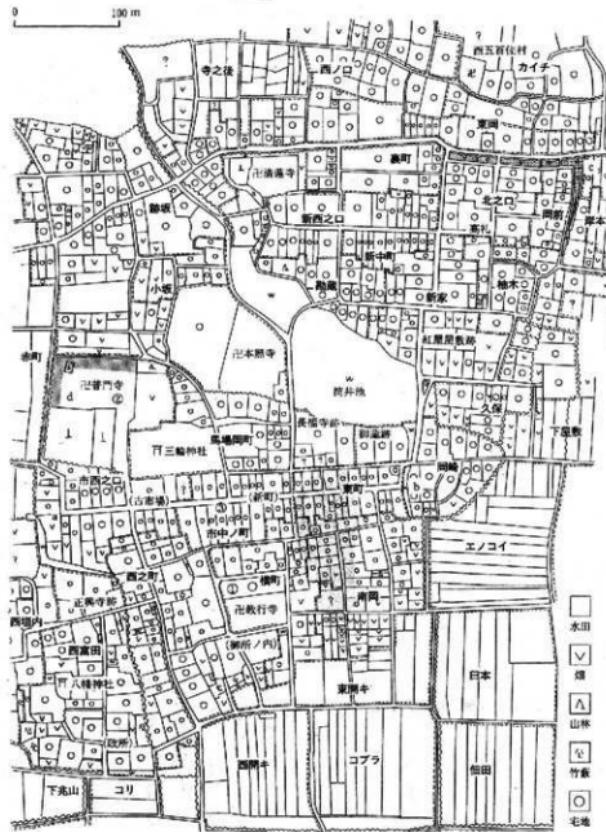


図14 富田周辺地籍図  
福島克彦「戦国後期摂津富田集落と『寺内』」(『寺内町研究』5 2000)

大阪平野では、もちろん平野部に位置する寺内町も多いが、大坂(石山)をはじめ、枚方・富田や小浜、河内大ヶ塚など、丘陵上やその先端に位置する寺内町も少なくない。丘の上は、決して好ましい居住地ではないため、これまで人が余り住んでいなかつたはずだが、本願寺の資金力と技術力で山をくずして平地を創出したり、井戸を掘ったりして都市開発したのであろう。

では、そうした都市建設の技術者はどこからやってきたのであろうか。町づくりの専門家は近畿地方にもたくさんいたであろう。ところが、城づくりに際しては、その専門技術者を加賀国から招聘したと、先に紹介した「信長公記」には書かれてあるのである。

### おわりに　－近畿から北陸へ－



図15 清沢義得寺跡地形図

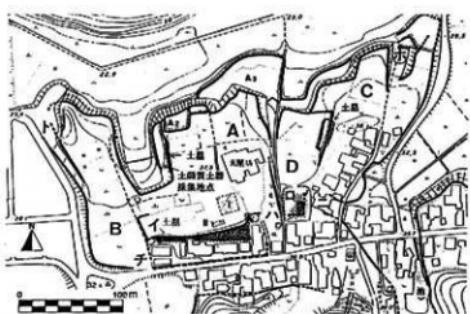


図16 山田光教寺跡周辺の地形図  
瀧川明史「山田光教寺跡について(上)」(『石川考古』186 1988)

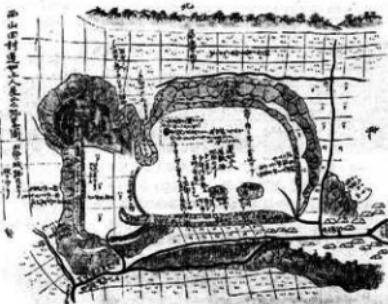


図17 山田光教寺跡絵図  
瀧川明史「山田光教寺跡について(上)」(『石川考古』186 1998)

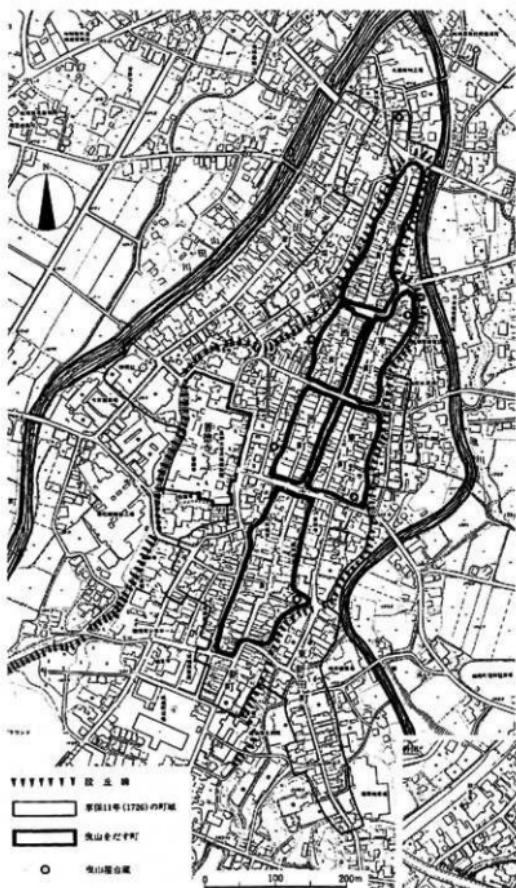


図18 城端町全図  
西川幸治ほか「庄内町の研究」(『寺内町の研究』) 1998)



図19 天正9年頃の城端  
堀宗夫「城端善徳寺」(『北陸の中世城郭』8 1998)



図20 安賀寺期の勝興寺寺内町推定復元図  
『おやべ市の歴史と文化再現』(小矢部市 2003)



図21 國境整備前の地図  
金井年「寺内町の歴史地理学的研究」(和泉書院 2004)

#### 【参考文献】

- 『医王は語る』(富山県福光町・医王山文化調査委員会、1993年)  
『史跡能登石動山』(石川県鹿島町教育委員会、1979年)  
『よみがえる平泉寺』(勝山市、1994年)  
『中巨大阪の都市機能と構造に関する調査研究』(大阪市立博物館、1999年)  
山科本願寺・寺内町研究会編『戦国の寺・城・まち』(法藏館、1998年)  
高橋康夫他編『図集日本都市史』(東京大学出版会、1993年)  
福島克彦『戰国附寺内町の空間構造』(『寺内町研究』10、2005年)  
福島克彦『戦国織襷期折津律富田集落と「寺内」』(『寺内町研究』15、2000年)  
唐川明史『山田光教寺跡について(上)』(『石川考古』186、1988年)  
土屋敷教夫『井波・城雞の町並み』(『国説日本の町並み』4、第一法规出版、1982年)  
堀 宗夫『城端善徳寺』(『北陸の中世城郭』8、1998年)  
金井 年『寺内町の歴史地理学的研究』(和泉書院、2004年)  
『おやべ市の歴史と文化再見』(小矢部市、2003年)

# 杉山砦の発見をめぐって

## ——県内最高所の城郭遺跡が語るもの——

高岡 徹

### はじめに

去る平成18年11月、筆者は南砺市の旧城端町と旧利賀村境の杉山山頂で中世の砦跡（ここでは便宜上「杉山砦」と呼ぶ）が存在することを確認した（図1参照）。本稿ではその砦跡の概要を報告すると共に、築城の背景や目的、さらにこの砦が五箇山をめぐる戦国史の中でどのような役割を果たしたのかという点についても述べてみたい。

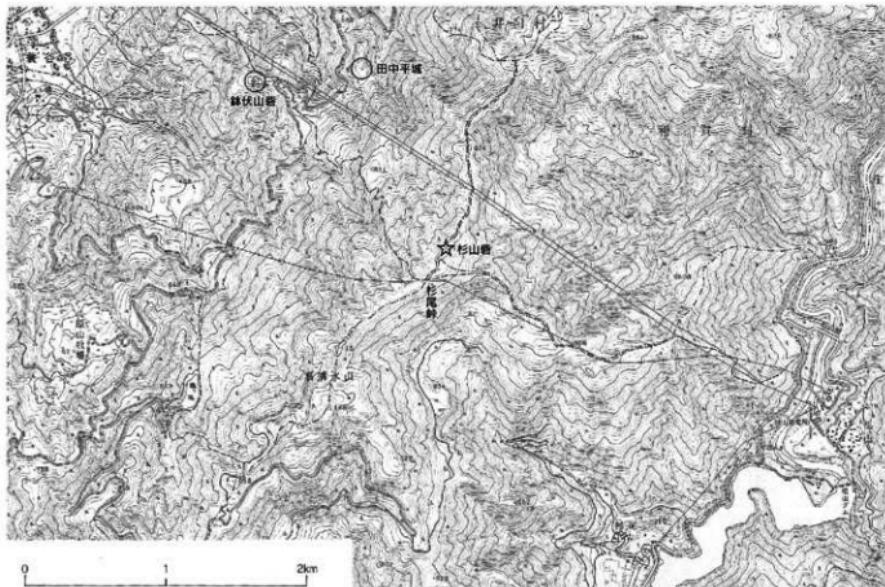


図1 杉山砦周辺の城跡分布図

### 1 砦跡の発見まで

#### ●高清水山地の城砦群

「杉山の山頂に堀切の跡がある」との情報を最初に筆者に寄せられたのは、地元の城端山岳会会員西川清澄氏である。そもそもその発端は、平成18年10月29日に城端で同山岳会の創立50周年記念シンポジウム「今蘇る古道 道宗道」が開催され、筆者が当日のパネラーの一人として「道宗道」とその道沿いに残る高清水山地（南砺の平野部と五箇山の境にそびえる山並）の城砦群について語ったことに始まる。その際、お世話になった同会の水上成雄氏より堀切の話を聞かされ、現地を知る西川氏を紹介して頂いたわけだ

ある。聞けば、五箇山との境で、古来交通の要衝であった杉尾峠から尾根道(いわゆる「道宗道」)をたどった所にあるという。話を聞いて、思わず「やはり、あったか」という興奮がこみ上げて来るのを感じた。

実は筆者と高清水山地との付き合いは、20年も前にさかのぼる。昭和62年のことである。当時、福野町教育委員会に勤務する林浩明氏より井波瑞泉寺の背後にそびえる八乙女山の山上に空洞状の遺構があるとの情報を聞き、平成元年11月に踏査し、堀切を含む砦跡の存在を確認したのが最初である[高岡1993]。

戦国期に一向一揆の一大拠点であった瑞泉寺の背後とはいえ、山頂の標高は751.8mに達する高所である。これだけの高さの所にある城跡は県内でも数か所にしかすぎず、初めは半信半疑であった。しかし、その後八乙女山から南に伸びる尾根筋でいくつもの堀切が見つかったうえ、南砺の平野部に面した山地の中腹部でも新たに4か所の城砦跡(小屋場平城・新山砦・田中平城・鉢伏山砦、この内2か所は林浩明氏からの情報に基づく)を確認できたことにより、高清水山地一帯で広範囲に城砦などの防御施設が分布することが判明した(図2参照)。当時、実態を把握するために行なった各遺構の踏査と縄張図の作成にあたっては、筆者の主宰する「とやま歴史的環境づくり研究会」会員など有志の方々に大変お世話になった。林道が近くを通るとはいえ、険しい高所が多く、また長年にわたり人の手が入っていないため、樹木が繁茂し、測量などの調査は難渋を極めた。

#### ●五箇山の一一向一揆勢力が築く

これらの城砦は誰によって、いつ、いかなる目的で築かれたのか。それを解明することが次の課題となつた。全5か所の城砦遺構の構築時期は、縄張や構造から見て、基本的には戦国期と考えられた。立地上の特徴を見ると、いずれも南砺の平野部を見下ろす位置に立地している。細かく見ると、北端の八乙女山だけが山頂部に立地し、他の4か所は高清水山地の稜線から平野側に張り出した尾根筋に立地しているのである。このことから、城砦群が一様に平野側に向けて築かれたことがわかつた。また、背後に五箇山地域が控えていることを考慮すれば、その五箇山地域の勢力が平野側に向けて築いた可能性が高い。特に南部の4か所については、ほぼ同じ高さで谷をはさんで横一線に並ぶことから、互いに連携



第1章 車両(機会)走行距離を管理する

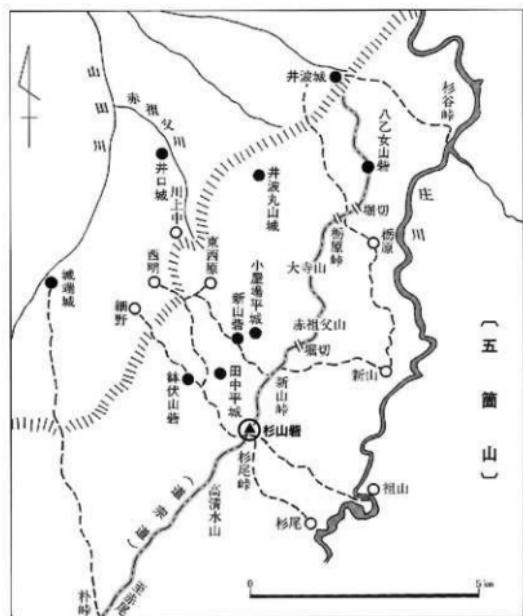


図2 新發現の杉山層と高塩水山地の城岩層(道官道は推定ルート)

を取っていたことが明らかであり、同一の勢力によって築かれたものと理解できた。

次に手がかりとなるのは、高清水山地を通る交通路である。一般にどのような高所の山上であっても、城砦の立地は交通路を抜きにしては語れない。高清水山地の場合、図2のように古米、南砺の平野部と五箇山を結んだ道がいくつも見出される。五箇山地域はこれらのルートによって外部の世界と結ばれ、政治・経済・文化的な交流が行なわれていたのである。同図によると、八乙女山砦は杉谷峠や板原峠に近く、他の4か所は新山峠や杉尾峠に近い。すなわち、これらの城砦群はいずれも高清水山地の山越えルートと密接な関わりを持ち、それらのルート掌握を目的としていたことが推測できた。以上の点から、城砦群は五箇山側の勢力が南砺の平野側から五箇山へ入るルートを押さえ、防衛を図るために築いたものとみなされた。

では、当時これらの城砦群を築いた五箇山の勢力とはいかなるものであったのか。戦国期の五箇山には、蓮如に深く帰依した赤尾道宗(永正13年=1516没)以来、浄土真宗の信仰が広まり、門徒組織が形成されていた。越中の一向一揆(真宗勢力)は初め上杉氏に敵対したが<sup>1</sup>、天正4年(1576)本願寺と上杉謙信の和睦により、その後は上杉と結んで織田方に対抗した。しかし、越中の国人らは謙信死去(同6年)により多くが織田方に走り、同9年(1581)一揆の代表的勢力であった瑞泉寺・勝興寺はいずれも織田方の攻撃により陥落した。この結果、南砺の平野部は織田方によって制圧された。一方、中央では同8年閏3月、本願寺の顕如が織田信長と和睦し、11年にわたる「石山合戦」に終止符が打たれた。しかし、顕如の長男教如はなおも人坂本願寺籠城を主張し、各地の門徒に蜂起を促した。五箇山地域の真宗勢力もまさにその教如に応する形で上杉景勝と連携しながら織田方への抗戦を継続したとみられる。越中国内で織田方に敗れた上杉方の国人達も同じ頃、五箇山へ転進し、一揆勢力に合流した。さらに瑞泉寺の住職顕秀も瑞泉寺の陥落後、八乙女山などの山中に籠って佐々方と戦ったと伝えられており、高清水山地一帯に築かれた城砦群が瑞泉寺や同寺を支援する五箇山の一揆勢力によって築かれたことが推測された[高岡1995a・同1995b・同2006]。

#### ●中世軍用道路としての「道宗道」

ところで、この城砦群を考えるにあたり、もう一つ注目されたのが伝説の「道宗道」と呼ばれる古道である。「蓮如上人御一代記聞書」によれば、前述の道宗が親鸞の御影を安置する所へ参ることを毎月の心かけにしていたという。当時、道宗のいる五箇山の最も近くで親鸞の御影を安置していたのは井波の瑞泉寺であった。つまり、道宗は五箇山から井波まで月に一回、高清水山地を越えて井波へ通つたことになる。その時、道宗が通ったと伝えられるのが高清水山地の稜線をたどる道(いわゆる「道宗道」)である(図2参照)。伝説の真偽はともかく、現在でも稜線の一部には深く掘り込まれた道形が認められるが、はつきりしない所もある。しかし、途中の赤祖父山や板原峠付近の稜線に残る堀切の跡を見れば、単に道宗の参詣のための道と言うより、むしろ中世、日常的に五箇山と井波など南砺の平野部を結んだ山岳道路の感が強い。そして、途中の堀切はその稜線上の移動を遮断するものであり、軍事上の防衛施設とみなしてよい。このことは、逆に高清水山地の稜線ルートが軍勢などの移動に利用されていたことを裏付けるものである。また、「道宗道」の稜線ルートをタテ軸とすれば、前述の杉尾越えなどはそのタテ軸から平野部へ下るヨコ軸のルートとなる。とすれば、「道宗道」はそれら何本ものヨコの道をつなぐ一本の骨幹のようなルートであったとみられる。その道沿いにこれらの城砦群が存在することは、「道宗道」と城砦群が有機的に関連することを示すものであり、まさに中世の軍用道路としての性格もあわせ持っていたとみられる。

そうした観点から、筆者は前述の5か所の城砦群確認後も将来的に「高清水山地の山中で同様の遺構が発見される可能性は十分にある」と述べた[高岡1995b]。特にその分布状況から、南部の4か所がいずれも中腹部ばかりに立地することに疑問を抱いてきた。もっと高い所にそれらの要となる「諸の城」があるのではないか——と考えたのである。その発見の予感めいた思いが、やっと10年を経て現実のものになったわけである。冒頭で「やはり、あったか」と記したのには、そのようなわけがあった。

## 2 碓跡の概要

### ●「杉尾越え」を登る

寄せられた情報を確認するため現地に向かったのは、五箇山の奥の峰々に白いものが見え始めた11月11日のことである。朝、旧城端町役場前に集合し、まず車で高清水山地中腹の鉢伏山(標高607.5m。砦跡がある)付近に上がる。ここからはよいよ車を降りて、杉尾峠を目指して歩く。すでに時刻は10時半、空は曇っている。案内者の西川氏を先頭に城端山岳会員らも同行して、総勢8名の調査隊となつた。最初はゆるい尾根道が続き、途中で県指定天然記念物の梨の木を横に見る。すぐに登りが始まる。標高800m台まで登ると、やっとなだらかな中腹部(「天池平」)に出てひと休みである。この一角に、今は土が堆積して半ば埋まっているが、天池が存在する。自然の池である。北の八乙女山周辺の尾根沿いにもこうした天池は多く分布しており、高清水山地がゲリラ戦の山籠りに適した山であることを実感する。そばには杉尾越えの旧道とみられる道の跡がある。やはり昔の山越え道はこうした水場のそばを通っていたのだろう。

雨の降り出す中、再びきつい登り道をひたすら登る。ガスも出てきて、あたりは暗くなつた。峠でもう少しとなつたが、12時を回っていたので、標高1,000m付近の大杉の所(地蔵がある)でシートを張り、昼食にする。雨は本格的にひどくなつた。最悪のコンディションだが、ここまで来たら、とにかく現地を見て戻るしかない。昼食後、まもなく五箇山境の尾根筋に出た。杉尾峠(標高1,067m)である。付近は広く、ゆったりとした地形である。ただし、西川氏によれば、旧の峠はここからもう少し北東へ行った所であるという。いずれにしろ、ここを下ると、五箇山の杉尾や祖山の集落にたどり着く。一方、これと交わるように左右の尾根伝いをたどるルートが前述の「道宗道」ということになる。まさに杉尾峠はこの山中にあって交通・軍事上の要衝である。ともかく、峠から尾根伝いに北東方向へ歩く。途中に城端・平・利賀の境界杭があり、そこからさらに50mばかり歩くと、目の前に尾根道を断ち切る堀切が現われた。間違いなく、人の手によって尾根道が深く切られており、中世の防御施設であることがわかる。その先には三角点を据えた杉山の山頂も見える。ここまで長く辛い登りの苦労も一度に吹き飛ぶ思いであった。

### ●杉山の山頂に郭と堀切

とはいへ、下山のことも考えると、時間は限られている。すぐに周辺の調査に取りかかる。立地を確認すると、砦は南西から北東へ伸びる杉山の山頂部に存在する。最高所の標高は1,110.5mで、これは確かな遺構を残す山城としては本県で最高所の立地となる。ちなみにこれに次ぐ高さの山城は——明確な遺構を残さない伝承地を別にすれば——黒部市の鉢ヶ岳砦(標高861m)や上市町の千石山城(同757m)であるから、県内全域を見渡してもその高さが理解できる。砦の構造は中心となる主郭を山頂部に置き、尾根続きの北側と南側を堀切によって防護したものである。そして、この2本の堀切によって砦が外部



写真2 屋根道を切る堀切(主郭南側の堀切。奥が山頂部の主郭)



写真3 主郭側より南堀切を見下ろす



写真4 南から主郭の中心部を見る



写真5 北堀切(左手が主郭側の切岸)

と画されている。山上に築く城郭としては、最も単純で基本的な構造と言える(図3参照)。興味深いのは、近くの新山越えの途中に築かれた新山砦(標高604.8m)もこれと同様の縄張を示すことである。ここも主郭は $10 \times 65\text{m}$ の南北に細長い平坦面で、南北両端に設けられた堀切によって外部と両されている[高岡1995aほか]。このように縄張が一致する点は、杉山砦の構築者を考える際に大きな手がかりとなる。

さて、2本の堀切によって守られた杉山砦の主郭(山頂部)はほぼ平坦だが、広さは $5 \times 25\text{m}$ で南北方向に細長い。決して広いものではなく、小さな郭である。これを守る北側の堀切は上幅6m、深さは主郭側で2.6m、反対側で0.9mを測る。北側へ続く尾根道に対して大きな段差が設けてあることがわかる。一方、南側の堀切は上幅7.5m、深さは主郭側で2.0m、反対側で1.7mを測る。こちらは南側の尾根手続きに対し、やや高い程度である。堀底の中央には通路にしたとみられる土橋状の高まり(幅0.5m)がある。なお、南側の平野に面した主郭の西側は人工的に切り立てた切岸で、中央付近で高さ4.7mを測る。直下には幅1.5m程度の平坦面が帯郭状に付随する。このような高所にもかかわらず、防御上の基本的な普請がきちんとされていることに感心する。

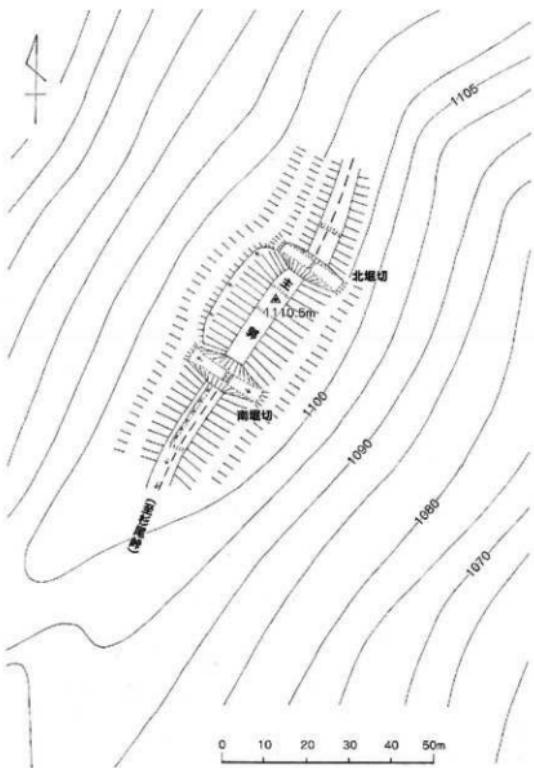


図3 杉山砦縄張図

[高岡 勲 作図]



写真6 北堀切を側面から見る(左手が主郭側)

### ●五箇山防衛の砦

ここで砦が構築された時期とその背景などについて考えよう。現在残る遺構(郭とその両端をカットする堀切)が中世山城の基本的な縄張を示していることはすでに述べた。次に立地を見ると、高清水山地の稜線を縦走する前述の「道宗道」上のピークにあたり、さらに交通の要衝とも言うべき杉尾峠に近いことから、その「道宗道」と「杉尾越え」という2大交通路を押さえるために築かれたことがわかる。とすれば、この砦は前述の5か所の城砦群と同様、戦国末の天正中期に五箇山を本拠とする一向一揆勢力が五箇山を防衛するために築いたものと考えてよい。

前述の新山砦が当砦と同じ縄張を残すことでも一つの裏付けとなろう。改めて山中での位置を確認すると、杉尾峠から平野側に下る途中の尾根に鉢伏山砦が、またその手前から分かれた道が田中平城のそばを通ることに気づく(図2参照)。つまり、中腹部に立地する二つの砦が山道によって背後の杉山砦と結ばれているのである。すでに述べたように鉢伏山と田中平は麓の平野側から五箇山へ進攻しようとする織田(佐々)方を阻むための拠点である。その背後の杉山山頂に連絡可能な砦があるということは、杉山砦が通常は鉢伏山と田中平の両城砦を後方から支援すると共に、万が一、両城砦が危機に陥った時には山道伝いに撤収してたて籠る「詰の城」として位置付けられていたことを示している。とはいえ、砦自体は小規模であることから、日常的には物見や、一揆の本拠である五箇山と前線拠点の鉢伏山・田中平を結ぶ中継・連絡の拠点としての機能を果たしていたのであろう。それにしても、五箇山の一揆勢力がこうしたシステムで防衛を図っていたことは、「杉尾越え」のルートが当時の五箇山と南砺の平野部を結ぶ軍事上重要な交通路だったことを物語っている。

### おわりに

以上、杉山砦の発見の経緯から砦の構造、構築の背景などについて述べた。今回の発見によって、高清水山地の稜線を縦走する山岳道路(いわゆる「道宗道」)の存在が、従来考えられていた以上に明確なものとして浮かび上がって来た。さらにまた、筆者が過去の調査研究の過程で提起した、五箇山一揆勢力と織田(佐々)勢力との対峙状況がより具体的な形で浮き彫りになった。砦の規模自体は小さいが、この発見が五箇山をめぐる戦国史の様相を我々に語りかけてくれる意義は大きい。今後もこの高清水山地で同様の城砦が見つかる可能性は高いと思われ、これからも地道にこの地域での調査研究を続けていく必要性を感じている。

なお、悪天候の中、今回の杉山砦跡の現地調査に同行・協力いただいた城端山岳会の西川清澄・中道伸雄・田中勇孝・藤田豊久・水上成雄氏、南砺市教育委員会の林浩明・山森伸正氏に心より感謝の意を表したい。

### 〔参考文献〕

- 高岡 徹 1993 「八乙女山とその周辺の遺構について」「瑞泉寺と井波城をめぐる戦国史——「いなみ歴史の森」構想——」とやま歴史的環境づくり研究会  
同 1995 a 「井口村の中世城館」「高清水山地と戦国の城砦群」「井口村史」井口村  
同 1995 b 「越中五箇山をめぐる城砦群と戦国史の様相」「中世の風景を読む」第4巻  
新人物往来社  
同 2006 「戦国末の五箇山と織田・佐々氏」「戦国の寺・城・いくさ——南砺の城と人——」「戦国の寺・城・いくさ」イベント実行委員会  
〔追記〕 本稿は『砺波散村地域研究所研究紀要』第24号(2007)に発表したものをおもに内容変更のうえ掲載した。

# 高清水山地縦走調査報告 —稜線の山岳古道に城郭遺構を求めて—

高岡 徹

はじめに

高清水山地とは南砺の平野部と五箇山を隔てる、標高1,000m級の山である。この山中では平成元年(1989)以降、八乙女山砦・小屋場平城・新山砦・田中平城・鉢伏山砦といった城砦遺構が相次いで確認された。これらの遺構はわずかな伝承を除けば、従来、文献史料にも記されておらず、ほとんど一般には知られていないかった。

私はこれらの城砦群の確認と調査の結果、それらが戦国末に五箇山の一向一揆を中心とする勢力が織田(佐々)方に対抗するため築いたものと推測し、これまでいくつかの論稿を発表してきた①。さらにごく最近、新たな発見があった。それは一昨年11月、杉尾峰に近い杉山山頂(標高1,110m)で新たな砦跡の存在を確認したことである。この結果、山地の稜線上で2か所、中腹の尾根上で4か所、計6か所の城砦が確認されたことになり、城砦群が当初よりも広い範囲に分布することが明らかになった。特に今回、杉山砦が稜線上で発見されたことにより、この稜線を通ったとみられる「道宗道」が中世の交通路として、これまで以上に明確な形で浮かび上がった②。

ところが、直後に高清水山地で風力発電のための風車建設設計画が公表されたため③、なるべく早い時期に山中に存在する城郭遺構以降、地元の南砺市教育委員会に協力する形かねための予備調査を2回行なった。本稿は

## 1 第1次調査（平成19年3月19日～21日）

- ・調査区間 大寺山～杉山
  - ・参加者 高岡 勝・山森伸正(南砺市教委)・金子良成(ガイド、井波自然観察友の会会長)  
計3名

当初、柄原峠から杉尾峠を経て高落場山にかけての稜線を2泊3日の日程で調査する計画を立てていたが、直前に雪が降ったため、この内の北部区間を1泊2日（3日目を予備日に設定）の日程で調査する

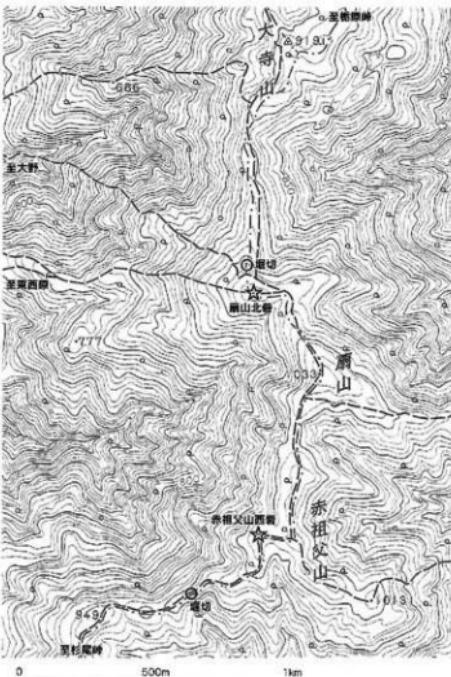


図1 赤祖父山周辺の地質

計画に変更した。

### [3月19日]

午前10時10分、旧利賀村柄原のスキー場より大寺山北側の稜線に向けて登る。積雪のため、各自持参のカンジキを付け、これに寝袋やテント、食料などを入れたリュックを背負っての調査行となる。ベテランの金子氏はともかく、私と山森君は二人共冬山が初体験であり、もとよりカンジキを履いた経験もない。見よう見まねで初めは金子氏の後を追ってひたすら登るだけである。それにしても柄原から稜線までは予想外の急な斜面で、心臓はバクバク、汗は滝のように流れ、「何でこの時期にこんなことを計画したのか?」などと悔やんでみたりもする。それでも右手に柄原峠や八乙女山を見ながら必死で登り、ようやく12時40分に大寺山山頂北側の稜線に出た。何と登りに2時間半も費やした勘定である。あまりの疲れで雪の上に倒れ込んで休みを取る。幸い、ここで昼食となる。

予想以上の難行で「今日中にどこまで行けるだろうか?」、「体力が持つだろうか?」、などといろんな不安や心配がよぎったが、昼食を取ったことで少し元気になり、午後1時15分に出発。30分かけて大寺山の山頂付近(標高927m)に着く。山上から南に下ると、林道が扇山方向に向けて伸びている。この林道は途中で稜線に沿っているが、稜線沿いは「道宗道」の山岳古道跡と推定されるルートであり、遺跡などの存在も予想される。果たして建設当時、事前に教育委員会などに連絡・協議などがなされていたのだろうか。遺跡はもとより自然保護の観点からも、今後こうした林道の建設には慎重な対応と配慮が必要であると思われた。

ところで、扇山へ登る途中の稜線では杉林の間に堀切状の窪みが1か所認められた。思わず「堀切かな?」と思ったが、何分積雪のため、確認できずに通過する。そこから少し登った所に扇山の北西の支峰(標高987m)がある。ピークの上は平坦で、ここから稜線沿いに東へ進むと、不自然な段差がある。降りてから振り返ると、ピーク側が一段高くそびえている。一瞬「おやっ?」と思ったものの、深く考えずに先を急いで通過してしまった。

午後4時30分、扇山の山頂着(標高1,028m)。この手前から見事なブナの林になる。午後5時、赤祖父山山頂(標高1,025m)到達。薄暗くなつたが、少しでも距離を稼ぐため、前進する。午後5時30分、山頂から西へ少し下った西端の小ピーク(標高1,018m)に着く。ここで付近に溝や段状の平坦面があることに気づいた。ちょうど日没で暗くなつたことから、詳細は翌朝調査することとし、そのままピーク下の窪地で野営の準備にかかる。テントを張り終える頃にはすっかり暗くなり、私にとっては初めての雪山でのテント泊となった。その夜の内に新雪が10cm程度積もり、テントの上ではサラサラと雪の滑り落ちる音が聞こえた。ディナーは山森君が各種非常食メニューに腕を振るい、3人共心地よく酔いしれた。ところが、寝床は傾斜した雪の上だったため、夜中に体がずり落ちるのには参った。

### [3月20日]

午前5時起床。朝食後、周辺の調査にかかる。狭いピークを中心に郭状の平坦面を4か所、堀切状の窪みを2か所程度認めることができた。ただし、雪が積もつた状態での地表面の観察であり、これ以上の判断は無理と言える。とはいって、このピークで稜線沿いのルートが急角度で曲がること、またピーク上から麓の平野部に対する眺望がよいことから、城郭的な遺構が存在する可能性は高いとみられ、仮に当地を「赤祖父山西麓」と呼ぶことにした。

調査に手間取り、午前7時50分「皆跡」のピークを出発。広い尾根を西に下ると、やせ尾根になる。防御上は要害な地形と言える。やせ尾根の途中に堀切の跡がある(図2参照)。ここはすでに平成3年(1991)井口村史編纂の過程で確認された遺構である(上幅10m、深さ3.4mの大規模なもの)。ここは積雪の中でも明瞭に形を認めることができる。午前10時40分、新山峠着。ここから先のルートは次第に深くなる雪の中、アップダウンを繰り返す形になり、疲労が濃くなる。午後0時20分、標高1,020m付近で昼食を取る。ここで積雪の深さから、これ以上の調査は困難と判断し、体力的なことも考え、この日の調査目標を杉尾峠までとした。実は夜の宿泊を城端の桜ヶ池に予約しており、夕方、五箇山側の杉尾に下山し、あらかじめ待機中の迎えの車で宿に向かうことについていたのである。

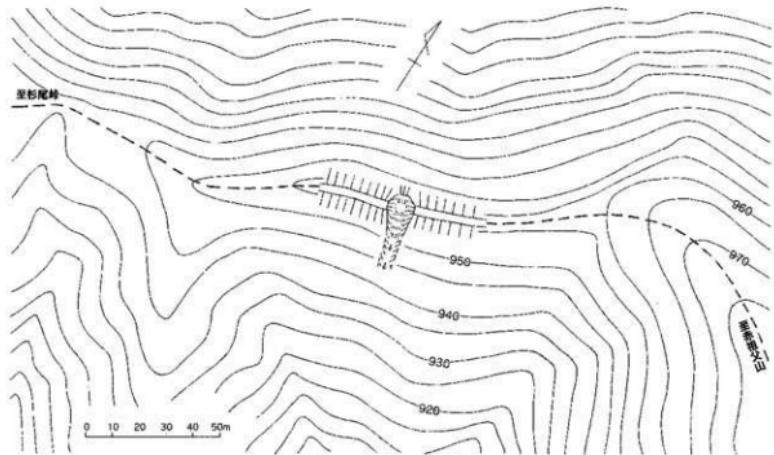


図2 赤祖父山南端切

(高岡徹作図)

本当はこのあたりで下山しておればよかったのである。このあと、深い雪の中を無理して杉山山頂(一昨年11月に岩跡を確認済。標高1,110m)まで登ったばかりに余計な時間を使うことになった。杉山山頂では、雪の上からではあったが、堀切や郭の跡を確かめ、稜線をさらに南の杉尾跡側に下った。こうして午後2時30分、いよいよ東側斜面を下り、五箇山の祖山を目指して下山する。「4時間もあれば、降りられるはず」という言葉に励まされ、どんどん急な斜面を下る。幸い、しばらくは晴れ間が出た。しかし、ルートは予想外に長い尾根伝いで、アップダウンもあり、楽ではなかった。あたりが薄暗くなつた頃、ようやく下に祖山の集落が見え、急な尾根を下降する。しかし、カンジキを履いた足が竹や笹の間に落ち込むため、急激に疲労が加わり、ベースが落ちた。このため、午後6時30分、「これ以上は危険」との判断から、ガイド金子氏の指示でこの日の下山をあきらめ、途中の小さな平場で野営することになった。

金子氏がぎりぎりの所で的確に判断したおかげで、暗い中で滑落することもなく、安全な一夜を過ごせたのは有難いことであった。とはいえ、下に家々の明るい灯を見下ろしながら、乏しい食料を使った夕食は、忘れ難いものとなった。

〔3月21日〕

朝は空腹もあり、午前4時30分に起床。ゆっくり支度し、残った味噌汁を一杯だけ飲んで下山する。切り立った岩肌にしがみつき、わずかに残る雪の所を選び、慎重に足を運んで下降し、ついに8時20分、国道の祖山トンネル付近に降り立った。下降に2時間費やした勘定である。明るい中でさえ、これだけの時間である。暗い中、疲労した体での下降は取り返しのつかない事故を招いたかも知れない。「無理をしなくてよかった」と、降りてきた急斜面を見上げながら、金子氏の賢明な判断に心から感謝せずにはいられなかった。

## 2 第2次調査(平成19年6月9日)

- ・調査区間 扇山～赤祖父山
- ・参加者 高岡徹・山森伸正(南砺市教委)・藤田豊久(城端山岳会)・田中勇孝(同前)・小原耕造  
(富山県自然解説員) 計5名

3月に実施した第1次調査の際、雪の上で認めた、赤祖父山西端ピークの皆跡らしき地形の実態を無

雪期に調査するため、日帰りで実施した。今回は雪がないため、井波の町から八乙女山を経由し大寺山へ上がる林道を使うことにした。午前8時15分、旧井波町役場を出発。林道自体は柄原峠付近から南はほとんど一般の市が通れない悪路である。両側から草がおおいかぶさる道を辛うじてすり抜け、大寺山と扇山の中間の鞍部にあたる稜線に9時15分に到着。ここで車を降り、調査用器材などを担ぎ、まず扇山を目指して歩く。昼から雨と雷の予報だったが、今のところ、何とか雨は落ちていない。

まもなく扇山の北西ピークの北側後線で堀切状の窪みに出くわした。尾根が細く、急な登りになる所である。ここは前回、積雪期の調査で「堀切かな?」と思った地点である。茂った草を手分けして刈り払ってみると、確かに堀切の遺構と思われる。稜線の東側を掘り残して通路(幅0.5m)とし、西側を深く掘り下げ尾根筋をカットした形である。上幅は5mで、深さは扇山側(南側)が2.2m、反対の大寺山側(北側)が1m程度となっており、構造から見て北の大寺山から扇山方向に来る敵を阻むための防御施設と考えられる。赤祖父山付近はともかく、この方面でこれまで遺構は確認されていなかったことから、やはり稜線沿いのルート(道宗道)には杉山や赤祖父山だけでなく、もっと広い範囲で防御を目的とする遺構が分布することが判明した。このことは高清水山地城砦群の性格を考える上で重要な発見であると思われた。さらにまた、積雪期の調査が遺構の有無を把握する際の手がかりとなることも確認できた。

この堀切からさらに稜線を少し登って、扇山の北西ピーク(標高987m)に出る。頂部は平坦な地形(17×19m程度の広さ)だが、ほぼ自然の平坦面で、まわりはゆるく下っている。統いて頂部の東側で大きな段差を下る。この段差は積雪期の調査時にちょっと気になった所である。改めてながめると、やはり不自然な段差である。東下には水平で幅広い尾根(幅約10m)が続いている。試みに高さを測ると、2.4~3.4mある。おそらく防御のために設けられた人工的な急斜面(切岸)であろう。さらに43m東に傾斜は少しうるいが、もう一段別の段差(高さ4m)がある。つまり、この北西ピークは東側の稜線に対し2段の切岸を設けていることになる。これだけ高い山では十分有効な防御施設であろう。とすれば、北西ピークは先に見た堀切で北側が、また2段の切岸で東側がそれぞれ守られていることになる。このことから、扇山北西のピークを核とする何らかの砦状施設が存在したことが考えられる。今、これを仮に「扇山北砦」と呼ぶなら、主郭となる頂部(A郭)がほとんど自然の平坦面であることから、ここが物見や臨時

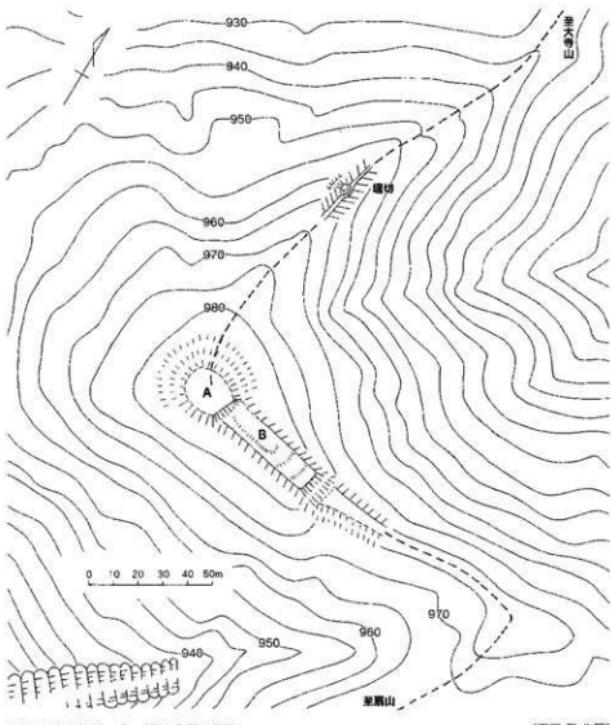


図3 扇山北砦(A~B 郭)と北側の堀切

(高岡 雄 作図)

の駐屯施設のような役割を果たしていたとみられる。東下の幅広い尾根の上も主郭に付随した郭(B郭)として位置づけられよう。頂部の周囲は樹木でよくわからないが、おそらく眺望がよく、臨時の軍事拠点としては十分利用価値があったとみられる。

このあと稜線のブナ林を抜けて、午前11時に扇山の山頂着。赤祖父山には11時15分頃に着く。積雪期と違い、まわりがびっしりと樹木におおわれていて、位置がよくわからない。休憩後、まもなく砦跡推定地の西ピークに着いた。積雪期にはまわりの山容や斜面の起伏が一望できたはずなのに、6月のこの時点でもう緑が繁茂し、ジャングルの中のようである。茂っていないのは、人の往来する稜線のルート沿いだけで、稜線の両側はほとんど見通せない。あまりの変貌ぶりに思わず肝心の西ピークを通り過ぎてしまったほどである。気を取り直して草木の間を見て回ったが、やはり堀切を備えた砦跡とみなせる。

「これで調査ができるかな?」思わず心配になったものの、とにかくみんなで昼食を取り、まず周囲の草木を刈り払いする。これで何とか最小限の見通しが得られたと思ったのも束の間、その頃から雨がひどく降り出し、あぐくに頭上で雷鳴が轟いた。その上、あたりが一気に暗くなつたため、手許もよく見えなくなつた。「中止してすぐに下山すべきか?」と悩んだが、次に来るのはいつになるかわからない。「やってしまおう」ということになり、薄暗い中、激しい雨に打たれながら見取図の作成にかかる。現地調査としては危険かつ最悪の条件下であろう。本米はもっと丁寧に周辺を観察すべきところだが、今回はそのような事情から、概略の把握にとどめた。何とか作業を終え、下山にかかったのは午後4時15分であった。

以下、今回確認した赤祖父山西砦の概要を記す。中心となるのは西の平野側に張り出した小ピークの最高所(標高1,018m)で、広さは12×22mと狭く、東側と南側に向けて傾斜した地形である。急斜面に面した西側のへりにはわずかに小高い部分があり、風除けの土壁の痕跡とも考えられる。このようにピーク上はほとんど自然の地形だが、稜線のルートがここで鋭角に折れることから、立地的に主郭(A郭)

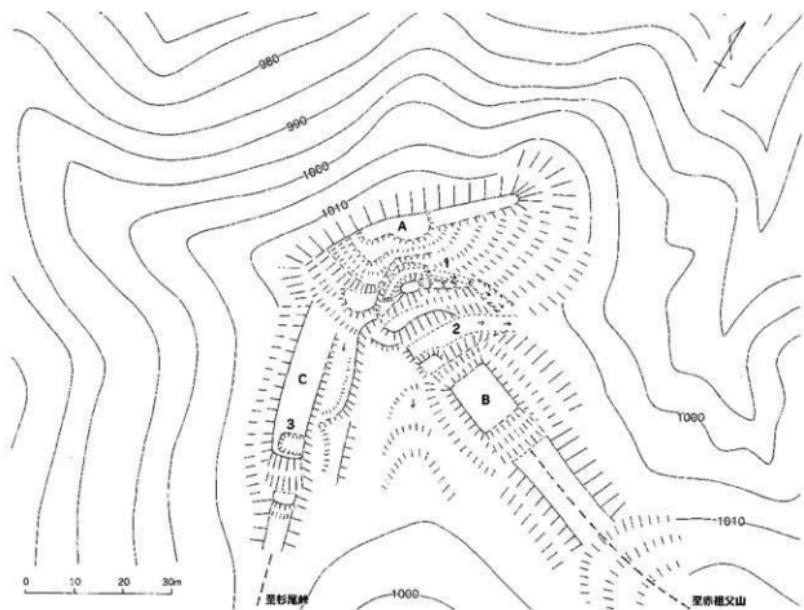


図4 赤祖父山西砦(A-C 断面 1-3 墓切)

(高岡 翁 作図)

とみなせる。郭の東側から南側はわずかに切り立てられ、段差が設けてある。注目されるのは東側(赤祖父山頂側)に対する守りで、土壘状の高まりをはさんで二重の堀切が設けられている。この二重堀切が当砦で最大の守りである。この内、主郭に近い堀切(No.1)は上幅4m、主郭側の深さは1.2mである。土壘は上幅が2m程度で、東下にある堀切(No.2)の底までの深さは3.6mを測る。かなりの高低差であり、特に赤祖父山頂に続く稜線が警戒されていたことがわかる。これは東のピークが当砦より高いからであろう。堀切(No.2)の上幅は約10mで、東側には一段高い平坦面(B郭、12×9m)があり、そこから東へはゆるやかに下っている。ここは主郭の東に設けられた外郭であろう。

一方、主郭の南は一段低く、上幅約7mの平坦面(C郭)が30mにわたって続いている。当砦の居住空間であろうか。この郭の南端には西側を掘り残した片堀切(No.3)の痕跡(上幅4m)が認められ、その先には高さ2.4mの段差が設けられている。前記の東側とは対照的に、南側はこうした切岸と小堀切で守っているようである。

### おわりに

2次にわたる縦走調査の結果を要約すると、次のとおりである。

- ①稜線沿いのピークで「扇山北砦」(標高987m)と「赤祖父山西砦」(同1,018m)の2か所の砦跡を確認した。
- ②これらはいずれも「道宗道」ルートが通るピークに築かれ、切岸や堀切によって防御されている。
- ③「扇山北砦」の北側後線や「赤祖父山西砦」の南側の稜線に設けられた堀切も、離れてはいるが、広い意味で両砦に付随する防衛施設とみなすことができる。
- ④これらの砦は一昨年11月発見の「杉山砦」と同様、「道宗道」ルートの要所を押さえ、物見や中継機能を果たす軍事拠点だったとみられる。このことは稜線沿いの「道宗道」が戦国期に高所の山岳軍用道路として使用されていたことを示すものである。

高清水山地の稜線をたどる「道宗道」には、このように砦や堀切の遺構が点々と残ることが確認された。これらは戦国期に軍事上重要な交通路であった「道宗道」を維持・防衛するための施設であったとみなせる。とすれば、稜線沿いの砦の構築者は織田(佐々)方に対抗し、高清水山地に拠った五箇山一一向一揆などの勢力と考えねばならない。

それにしても、このように高所の稜線をたどる古道と、その古道に直接関わる城砦群の遺構が今も良好に残されていることは、本県において注目すべきことと言わねばならない。高清水



写真1 横笛時の調査風景(左／金子良成氏と、右／高岡)



写真2 扇山(中央奥)と扇山北砦のあるピーク(右端)を北から望む



写真3 「扇山北砦」北側の堀切(北より)



写真4 「崩山北岩」主郭東側の切岸(東より)



写真5 「赤祖父山西面」の堀切No.2(手前)と奥の主郭を見る(東より)



写真6 同堀の堀切No.1(残雪がある)



写真7 赤祖父山の南邊切(被緑のルートが大きく斬ち切られている)

山地では、今回の成果を踏まえ、今後も詳細かつ計画的に分布調査を行なう必要がある。さらに近い将来に予想される開発計画に対処するためにも、山中の城砦群と古道を「南砺の戦国史を物語る重要遺跡」などとして一括保存する措置(文化財指定など)も検討していかねばならない。こうした指定のあり方は、全国的に見てもユニークであり、先駆的なものとなろう。今後、南砺市による積極的な取り組みに期待したい。

末尾ながら、今回の2次にわたる調査にご協力いただいた金子良成氏、城端山岳会の藤田豊久・田中勇孝氏、県自然解説員の小原耕造氏及び南砺市教育委員会(山森伸正氏ほか)に対し、心から感謝の意を表したいと思う。

〔註〕

- ① 高岡 徹 1993 「八乙女山とその周辺の遺構について」「瑞泉寺と井波城をめぐる戦国史——「いなみ歴史の森」構想——」とやま歴史的環境づくり研究会  
同 1995 a 「井口村の中世城館」・「高清水山地と戦国の城砦群」「井口村史」 井口村  
同 1995 b 「越中五箇山をめぐる城砦群と戦国史の様相」「中世の風景を読む」第4巻 新人物往来社
- ② 高岡 徹 2007 「杉山砦の発見をめぐって——県内最高所の城郭遺跡が語るもの——」  
『砺波散村地域研究所研究紀要』第24号 砧波散村地域研究所
- ③ 平成19年3月14日付北日本新聞記事「北海道の企業、南砺で風力発電計画」

〔追記〕

今春、両岩の遺構を再度確認するため、残雪の中、踏査を行なった。その際、赤祖父山西砦のA郭上から麓に井口城跡を望むことができた。井口城は天正9年(1581)9月に織田勢が攻撃を加えた一向一揆方の拠点である。このことは山中に拠る一向一揆の対織田(佐々)戦を考える上で大きな意味を持つと思われた。なお、当口は山森伸正氏のほか、中島正雄(砺波登高公)・藤田敏明(いのくち椿館)・水上成雄(城端山岳会)・開澤浩義(同前)氏にご協力いただいた。感謝申し上げる。

#### **協力者(順不同)**

#### **展示関係**

福井県立図書館・大谷大学・久保幸彦氏・富山県埋蔵文化財センター・富山県公文書館・高岡市伏木図書館  
善徳寺・行徳寺・道善寺・瑞泉寺・照円寺・南砺市井波図書館・山崎甚三郎氏・真田治悦氏・生田長範氏  
仁木 宏氏・久保尚文氏・高岡 健氏

#### **見学会・シンポジウム**

井波観光協会・心泉いなみの会・井波の風・井波自然観察友の会・瑞泉寺・黒崎直氏

#### **井波歴史民俗資料館企画展**

「南砺の城と人ー戦国の寺・城・いくさー」

見学会・シンポジウム資料集(増補改訂普及版)

発行日 平成20年3月31日

編集・発行: 南砺市教育委員会

〒932-0292 富山県南砺市井波520(井波庁舎3階)

TEL: 0763-23-2014(事務局: 文化課)

制作: アイアンオ一株式会社

印刷: 菅野印刷興業株式会社



 Memo



「戦国の寺・城・いくさ」イベント実行委員会

実行委員長 竹村武夫

構成団体：高瀬遺跡保存協会・井波観光協会・心泉いなみの会・井波の風・井波自然観察友の会・瑞泉寺